
時 報

No.9

1958.12

大阪大学山岳会

時 報 第9号 目 次

- A.A.C オバリン会長を訪ねて 篠田軍治
- 1957年度 冬山合宿報告
 - 1. 双六岳－赤牛岳往復
 - 同 食糧報告
 - 同 装備報告
 - 2. 槍平新人合宿
 - 3. 仙丈岳女子冬山合宿
- 1957年度 春山合宿報告 天狗尾根より五竜岳、爺岳
- 1957年度 夏山穂高合宿報告
- 冬山食糧 特製パンについて
- 冬用テント製作報告
- 1957年度一般山行報告
- 岩登りトレーニング記録
- 編集後記

(本時報に報告された山行は、1957年4月～1958年3月の記録である。)

A.A.C オバリン会長を訪ねて

篠田軍治

昨年秋シカゴで開かれた第二回世界冶金会議の出席の途中クリーブランドに立寄る機会があったので、米国山岳会のオバリン会長を訪ねることができた。米国山岳会は会員四百人余という、いかにも貧弱な山岳会のようにあり、シエラクラブ（サンフランシスコ）やコロラド山岳会と比較すると桁違いに会員は少ないが、それでも英国の AC とか日本の JAC とかいうように国としての代表的な山岳会とされている。そして事務所は古色蒼然とはしているが、ニューヨークのセントラルパークの東に堂々たる門戸を張っている。小さいとは言え、事務室、図書室の外に講堂、ミュージアムをもったものを僅か四百人余で維持しているのだから相当なものである。

AAC はこれだけの会員数だから会員同志が非常に親しい。この点は日本から来た JAC の会員に対しても全く同じだ。だから大抵の場合、自分は JAC の会員だと言っただけで快く歓迎してくれる。

オバリン氏は日本にもカナディアン・ロッキーのアルバータの第二登をしたことでよく知られている。第一登は言うまでもなく一九二四年の槇氏の一行で第二登は戦後である。第二登の時に第一登の時に残して来た、頂上のピッケルを持って帰ったこと、それ以降同氏と当時の隊員との間に堅い結び付きができたことは、当時の新聞紙上に相当詳しく報道された。そんな関係で当時の隊員の三田幸夫氏にお願いして豫め手紙を出しておいてもらった。

会議の前に二週間の見学旅行があって、十月二十五日に工場見学後、ナイアガラを見物してバッファロに泊り、翌二十六日クリーブランドに着いた。早速、電話をかけてみると今晚は都合が悪いが明日は午前中は在宅だから迎えに行くということであった。翌日も季節外れの雪が降っていた。前日からゆきがちらついていたが、この日は気温もずっと下り、相当な雪で日曜日のため午後から郊外の農園に行って、見学班の全員が集まってお祭りをやることになっていたのが、急に大学のクラブ内に会場変更があった程であった。それでも市中は気温が高いためか積るほどでもなかったが、オバリン氏の車で郊外のフェアマ

ウントの山上の同氏宅に行ってみると驚いた。湿った雪だがもう十糶も積ってもまだ盛に降っている。

オバリン氏宅はニューヨーク辺の近代的な住宅と似てもつかない古風なものであった。そこには昨夜ヨーロッパから帰国したばかりの御尊父が待っておられた。父君は山には全く無関心だが、オーストリア系統の紳士でクリーブランドでは非常に有名な法律家である。オバリン氏は父の後を継いでおり、妹さんはハウストン隊でK2へ行ったことのある人に嫁している。

朝食の御馳走になった。カリカリに焼いたパンにメープル・シュガーをつけないかとすゝめられたので、小生はメープルシュガーはこの辺でも出来るのかと聞いてみたところ、実は自分の農場でできるのだとのこと。相当に広い農場が郊外にあった。日曜日にはいつも行くことにしている。今日も農場の中で魚釣をするつもりだったが雪が降ってしまったので雉打ちに行くことにした。農場に雉が沢山いるとのことであった。

食後、打ちくつろいで歓談の時、オバリン氏は来月始め渡英しACの百年祭に出席すること、父も殆んど同時に渡欧するが、全く違う方角で、共に一ヶ月ほどで帰米の予定だとか。アメリカでも不用意な登山者の遭難が多くて困るが、日本はどうだとか、日本山岳会には遭難対策にどんな組織があるかとか、色々と話がはずんだ。持参した三田氏のテンシン・ハウスでの写真、マナスルの写真と阪大山岳部の写真を差し上げたところ、非常に喜ばれ、日本の学生層が冬山中心であることには意外な趣であったと共に野呂川の渡渉の写真など、カナディアンロッキーでは我々も全くこれと同じだと言っていた。

時間の都合で惜しいところで話を打ち切って再びオバリン氏に送られて宿に帰ったが、帰りがけに父君は生憎の雪でと如何にも気の毒そうであったので、自分は日本では滅多に見られない紅葉に雪の景色をクリーブランドで眺めることができたのは、この上ない幸福だと述べたら如何にも嬉しそうであった。

一九五七年度

冬山合宿報告

1. 双六岳←→赤牛岳往復
2. 槍平新人合宿
3. 仙丈岳女子合宿

双六岳—赤牛岳往復

岡田博司
宍戸元

春の黒部下廊下横断に成功した私達は、積雪期の上廊下周辺にすこぶる興味がわいてきた。冬は記録に乏しく、特に戦後は殆んど文献のないことも、一層魅力を増すものとなった。

そこで上廊下に足をふみ入れる前に、まず冬の赤牛岳、薬師岳に目標をおいた。

第一回は、蒲田川左俣から双六小屋にはいり、こゝをベースに途中で AC を出しながら、赤牛、薬師（雲の平—薬師沢経由）を同時に二パーティでアタックしようと考えた。（55年12月—56年1月）ところが、夏ののどかな双六周辺とはうって変わって、徹頭徹尾、猛烈なラッセルと強風に悩まされ、双六から三俣蓮華まで数時間も要したほどだった。更に行動期間三週間中にたった二日しか晴天に恵まれず、三俣蓮華小屋でも十日近くも籠城を余儀なくされたことも禍いして、わずかに、笠、鷲羽岳往復と黒部源流の偵察にとゞまった。この失敗から双六周辺のスケールの大きさを知らされるとともに、槍、穂高より高度が低いにもかかわらず、黒部を通して日本海の雪と風が直接吹きつけ、すこぶる条件の悪いところであることがよくわかった。

今回は計画を赤牛一本にしぼり、少ない晴天を生かすため一時間でも行動出来る天気があれば、一時間だけでも行動することにした。双六周辺は、地形の関係からテントを張る場所は比較的自由に選べるからだ。食糧、装備もすべて、このような行動に応じるように計画された。次ぎに問題になるのは、大野間沢の通過で、これに対しては本文に詳しく書いた。第三にはこのルートでは逃げ道がないことから、一旦吹雪に閉じこめられると前回のようない苦しい経験を繰り返さなければならない。それには充分な食糧が必要である。メンバーは岡田（L）、兼清（装備）、山本（食糧）、野田（食）、

米林、広橋（OB）、宍戸（OB）の八名で、大野間乗越まで村瀬（L）、以下の新人によるサポートがついた。しかし、これはむしろサポートというよりは、新人のトレーニングといったものである。他に十一月に双六小屋に四十貫ばかりの装備、食糧を荷上げしたが、小屋から先は完全にノンサポートでやった。将来はポーラ・メソッドでもなく、ラッシュでもない夏山のような形で冬山をやりたいと思っている。今度の山行では双六小屋から先で、僅かだがそれが実行出来たと思う。それには食糧の軽量化と、ナイロンテントを使って行動にスピードを持たせることが必要だ。それと長期にわたっても、計画をくるわせないだけの十分な食糧、その意味で、乾燥野菜、水分を極力へらしたパンの研究など、食糧係を中心とした活動も見のがせない。なおパンについては神戸屋パン KK 東山氏の協力を得られたことも幸いだった。

行 動 概 要

12月26日 雨

蒲田川左俣のトラック道が、左岸から再び右岸にもどったところの飯場を借りる。ここに二俣の発電所が出来るので、トラックの往復が頻ぱんだ。

12月27日 曇一時晴

大野間沢の末端にかけトレースをつけに行く。夜でも迷わずに歩けるようにするためだ。大野間沢は岳沢ににたカール状の広い谷だ。本流はずっと左岸よりにあるので、右岸は広い台地になっている。ブッシュはまだ埋っていない。ルートはこの大地を行くのだが、ブッシュの中のラッセルはかなわない。輪カンが枝にとられるし、油断しているとボソツとはまりこんで、足が抜けなくなる。

大野間沢へは抜戸岳の岩壁から二本の沢が出ているが、これを渡るときが最も雪崩の危険がある。そこを過ぎれば、抜戸側のスケールは、ぐっと小さくなるから、危険はへる。しかし降れば降っただけ、すぐ新雪表層雪崩のおこるところだけに、油断は出来ない。たゞ本流は岳樺はまだ埋っていないし、この時期に大野間沢自体がなだれることはないだろうと考えた。

飯場（8・30）－大野間沢出合（9・45）－下の沢出合（11・15－11・45）－飯場（14・30）

12月28日 晴のち曇

満天の星空のもと午前一時半出発。大野間沢出合附近の迷いやすいところも、トレースがあるから大丈夫。クラストーしているので輪カンなしで昨日のところまで行けた。しかし、ここからはそうはいかない。ラッセルは股までである。

乗越で村瀬のサポート隊と別れる。彼れらが小さくなるまで見送った。こゝで、トラゲンしてきたスキーをデポ。帰りまでにドカ雪がくれば、大いにこのスキーが役立つことになる。一昨年は胸までもぐって、スキーなしではとても下れたものではなかった。

一つコブをこすと、もうラッセルはない。強い西風の中を双六小屋へいそぐ。小屋の附近はいつも風が強い。雪が吹きとばされて土が見えているところもある。双六小屋は雪もほとんど吹きこんでいない。

飯場 (1・30) - 大野間乗越 (12・45 - 13・15) - 双六小屋 (17・00)

12月29日 風雪 停滞

12月30日 風雪 停滞

12月31日 風雪 停滞

吹雪について、単独行者 (東京学芸大生) が三俣蓮華からやって来た。烏帽子から縦走して来たとのこと。このような単独行には大胆なのか無謀なのか考えさせるものがある。

1月1日 曇一時晴

十一時、晴れ間がみえだしたので出発。一昨年にくらべるとラッセルは少ない。風のわりに雪が降らなかったのだろう。小屋からはしばらくは夏道どおり進んだが、双六岳と三俣蓮華の最低鞍部から一旦稜線に出た。稜線では輪カンがいらぬくらいだ。

出発が遅かったし、天気もくずれてきたので、予定の赤岳までいかずに鷺羽乗越に幕営と決めた。

双六小屋 (11・00) - 鷺羽乗越 (15・15)

1月2日 風雪 停滞

1月3日 風雪 停滞

1月4日 晴のち曇

午前三時出発。満月で北鎌尾根が白くひかり、すばらしかった。鷺羽岳をまいて割物岳の稜線に出ると風が強くなった。ラッセルはここでも少ない。水晶岳のかゝりで、輪カンアイゼンにかえる。水晶の悪場も雪が予想外に少なく、ザイルも使わずなんなく通過した。あとは赤牛までたんたんとしている。午前十一時、ACから八時間で赤牛岳頂上に到着。

鷲羽乗越 AC (3・00) - 赤岳 (7・15) - 黒岳 (7・45) - ナカノゴヤ乗越 (8・30) - 赤牛岳 (11・00-11・30) - ナカノゴヤ乗越 (13・15) - 黒岳 (14・15) - 赤岳 (14・45) - AC (17・00)

1月5日 雪一時晴のち風雪

午後から晴れてきたが、始めの原則に従い撤収を始める。だが、三俣蓮華のピークを越したころからガスがまいてきた。風雪も強くなってきた。稜線から双六のトラバースにかゝるところで、止むをえずテントをはることにした。

鷲羽乗越 AC (15・40) - 途中ストップ (17・00)

1月6日 風雪のち晴

きょうも、午後三時すぎ、ガスがなくなってきた。すぐ近くに樫沢岳が見える。双六小屋まで一時間のところだ。午後五時、小屋にもどる。

途中ストップ (16・00) - 双六小屋 (17・00)

1月7日 風雪 停滞

1月8日 快晴のち曇

春のような暖かな陽ざしだ。午前九時、小屋をあとに、下山の途についた。大野間沢はスキーで下ったが、特にスキーがなければならぬような積雪ではなかった。槍見温泉についたのは午後九時をすぎていた。湯舟で去年からのアカを落す。

双六小屋 (9・00) - 大野間乗越 (11・30) - 大野間沢出合 (16・30-17・00) - 飯場 (19・15) - 二俣 (20・00-20・40) ^{トラック便乗} - 槍見温泉 (21・10)

食糧報告

山本信樹

冬山合宿の期間が短い事、アプローチの長い双六小屋まで何をおいても一日で入らねばならない事、又サポート隊が大野間沢乗越までしか入らぬから、食糧計画は、秋のボッカを非常に重視した。そこで私たちは十一月二十名によって双六小屋に八人十八日間分の食糧、燃料（四立缶七個）、装備（ザイル二本、その他）を荷上げした。

従って食糧は十一月から正月まで双六小屋に貯蔵される事になり、腐敗、湿気、鼠、盗難に対する対策を十分考慮せねばならなかった。又、行動の面では合宿期間中（十二月二十五日～一月七日）の実働日数を五日と予定したので、少しの晴れ間でも十分活動出来る様、調理の簡便化を考えた。

以上のことから朝食には特別に工夫されたパン（“パンについて”を参照）を全合宿期間を通じて用いた。朝食の副食には紅茶、スープ、ミルク、バター等を配した。

昼食は行動中はクラッカー。停滞中は、クラッカー、中華そば、餅、パン、その他を用い、停滞中の昼食には必ずスープの類を配する様に心がけた。夕食は、餅と中華そばを中心にしてアタック前夜の夕食にのみ特にアルファー米を用いた。長期間の山行では、どうしても主食は「飯」ということが、全員の最大公約数であったが、米の重量、それを調理するに必要な大量の燃料から考えて、不可能なことだった。それに対し、アルファー米は軽量で、調理も簡単であったが、価格が高いため、アタック前夜だけに使用した。しかし、双六小屋では薪が充分使えるから、米を、宍戸、岡田先輩の助言によって五升だけ、特に双六小屋に荷上げした。夕食にも、朝食と大体同様のスープ類を副食として用い、それぞれ二、三の組合せを作り、これを行動、停滞、その他種々の条件とにらみ合わせて組合せた。以上が食料献立の骨組で、こまかい数字は表による。

冬山合宿のために試作した食品について

一、乾燥ホウレン草

特に初めこの試みとして乾燥ホウレン草を用いて見た。新鮮なホウレン草を水洗いしてから沸騰した湯の中にサッと浸し、軽くゆでて、水を十分絞った後、細引きを利用して綱のより目に根を通し日向で乾燥する。重量は、生の時に三貫目であったものが、乾燥後は三百匁となり約十分の一程度の重量になる。これを五十匁ずつポリエチレンの袋に梱包した。

調理は簡単で、十分間程沸騰すれば十分柔らかくなる。結構青みも残っているし野菜らしさもとどめて好評を博した。冬、春の野菜には適していると思われる。しかし、その製造過程から考えて、栄養価が新鮮なものより、ずっと低下していると思われるが、この点をもう少し改良すれば良いものが得られると思われる。

他にキャベツについても試みて見たが、これは失敗した。

二、梱包

梱包は第一に合宿の形式がラッシュに近い形式であるためと第二に天候の変化に応じた行動をとれるように食糧の梱包は、一括して石油缶の中に入れ、どの石油缶を開いても、必要な食糧が一式はいつているようにした。唯、米とパンは石油缶の不足と、

そのまゝでも貯蔵にたえると考えて、パンはボール箱、米は米袋のままで貯蔵した。しかし五升の米は全部、パンは総数三〇〇個のうち八五個が鼠に食われてしまっていた。これは八人の三日ないし四日分の食糧である。全部で十八日分しかない食料のうちの三日分を失っては計画は明らかに食料の面でくずれている。特に逃げ道がない赤牛アタックに於ては致命的とさえ言い得るのである。幸に、どこかのパーティが残してくれたビスケットその他を発見し、追加に持って上った餅とで何とか埋合せが出来たので、計画には大きな影響を与えなかった。

他方、最近相次いで耳にする秋に荷上げした冬、春山合宿用食料の山小屋での盗難についても相当気を配ったが、幸いこの方は無事で何よりであった。しかし、こういうことが、実際にあるとすれば、甚だ残念な事である。

鼠に対しては、食料を完全に石油缶の中に入れる事によって免れられるであろう。

日	朝		昼		夜	
12月28日	新穂高	米 一人当 一・四合 カレー 豚肉 四〇〇匁 キャベツ、玉ネギ ミリン干、ソーセージ	大沼乗越	パン 2コ (一人当) バター 一人当 1/6 Lb チーズ 一人当 1/6 Lb パン 2コ バター 1/6 Lb (一人当) チーズ 1/6 Lb	双六小屋	オニシライス 8袋 サバカン 2個 味噌汁 乾燥野菜 フ
29日	停滞	パン 16個 紅茶 バター 一人 1/6 Lb	停滞	オニシライス 8袋 サバカン 2個 味噌汁	停滞	米 一人当 一・四合 味噌汁 ソーセージ 福神漬
30日	停滞	パン 16個 ミルク	停滞	オニシライス 8袋 サバカン 2個 味噌汁	停滞	米 一人当 一・四合 ハム入りカレー ラッキョウ
31日	停滞	パン 16個 コンソメスープ	停滞	クラッカー 5本	停滞	米 一人当 一・四合 味噌汁・ワカメ 乾燥野菜
1月1日	双六小屋	パン 16個 紅茶 バター 一人 1/6 Lb	双六岳中腹	クラッカー 3本 ジャム レーズン 1/8 袋	鷺羽乗越	中華ソバ 4袋 モチ 一人3個 コンビーフ 1缶 乾燥野菜
2日	鷺羽乗越	パン 16個 サバカン 2個 ポタージュスープ ジャム、バター	停滞	クラッカー 5本 紅茶 チーズ 1/8 Lb 一人当 レーズン 1/8 袋	停滞	中華ソバ 4袋 モチ 8個 コンビーフ 1缶
3日	停滞	パン 16個 紅茶 サバカン 2個	停滞	クラッカー 3本 ミルク レーズン 1/8 袋	停滞	オニシライス 8袋 モチ 8個 コンビーフ 1缶

		バター 一人 1/6 Lb		チーズ 1/2 Lb		コンソメスープ 乾燥野菜
4日	鷺羽乗越	パン 16個 ポタージュスープ バター 1/2 Lb サバカン 1個	赤牛岳稜線	アワオコシ 20枚 レーズン 2袋 ジャム クラッカー 5本 紅茶	鷺羽乗越	米 一人当 一・五合 カレー ハム コンビーフ 1缶 乾燥野菜
5日	鷺羽乗越	パン 16個 コンソメスープ チーズ 1/2 Lb	鷺羽乗越	クラッカー 3本 ジャム レーズン 1袋	双六岳中腹	モチ 16個 コンソメスープ
6日	双六岳中腹	パン 8個 コンソメスープ 乾燥野菜	双六岳中腹	パン 8個 レーズン 1袋 チーズ 1/8 Lb	双六小屋	米 一・四升 ワカメ味噌汁 コンビーフ 2缶 乾燥野菜
7日	停滞	パン 16個 ミルク バター 1/2 Lb 味淋干	停滞	クラッカー 5本 レーズン 1袋 ミルク ジャム	停滞	中華ソバ 8袋 即席カレー ハム
8日	双六小屋	パン 16個 コンソメスープ 目ざし 16匹 バター 1/2 Lb	大沼乗越	クラッカー 5本 レーズン 1袋 ジャム	槍見温泉	

冬山用食糧表 (全量) 8人×18日分 (但し行動5日、残り停滞とする)

品目	数量	食数	ドロップ	100 匁		
主食	パン 300	150	野菜	乾燥ホーレン草	400 匁	15
(400食)	パン (神戸屋試供品) 一箱			(三貫目分)		
	米 5升	33		玉ネギ	1200 匁	
	α米 34袋	34	パン副食	ジャム	1000 匁	
	クラッカー 70個	100		干ブドー (大)	10箱	10
	あわおこし 70〃	16		ミカンカンヅメ (大)	3個	
	中華ソバ 20〃	40	飲物	紅茶	2	
	餅 5升	50		緑茶	100 匁	
肉類	コンビーフ 6	3		ジュースパウダー	10袋	10
	サバカンヅメ 16	16		ジュースコンデンス	2個	2
	牛肉 500 匁		味噌汁	味噌	400 匁	
	豚肉 500 匁			フ	2個	4
乳製品	チーズ (1/2Lbのもの) 8個	8		ワカメ	4袋	
	バター (〃) 6個	6		ジャコ	100 匁	
	スキムミルク (大) 5個	5	漬物	ラッキョウ	4袋	4
スープ	即席カレー (10人用) 2個			福神漬	8袋	8
	ベルカレールウ (8人用) 3個	3	調味料	食塩 (500gr)	2個	
	ポタージュ (10人用) 4個	5		味の素 (袋入り)	2個	
	コンソメ (30人用) 2個	7		ソース (小)	1	

干魚	サンマ味淋干し	40	3	砂糖	1500 匁
	目ざし	200	5	ケチャップ (400g)	1
嗜好品	キャラメル	20	5	ヘット	1kg
				コショウ	2 個

装 備 報 告

兼 清 喜 雄

米 林 外 茂 男

装備については特別目新しいものは別にな
い。ただ部の装備が老朽化して来ていたため
かなりの装備の新調を行なった。又軽量化に
ついては多少心がけた。双六小屋入りを簡単
にするため秋山の荷上げの際に多くの装備を
双六小屋迄荷上げしておいた。新調装備とし
ては、ビニロン製四人用ミード型テントを先
輩諸兄の御尽力により新調することが出来
た。この詳細は別項冬用テント製作報告を参
照されたい。又バーナーは秋からプリムス、ラ
ヂウスの各中型を購入し、エアマットも揃え
た。

ザイルは黒岳の悪場に備えて、テリレンザ
イル(9mm) 30m 一本、マニラ麻(12mm) 30m】
一本、補助ザイル(8mm) 30m 一本を携行した。
その他の装備は別項の装備表を参照された
い。

新しい試みとして行なったことは、ガソリ
ンをバーナーのタンクに入れる際に、従来漏
斗だけで入れていたので、たらしもれによる
ロスと引火の危険性が多かったが、今回より
サイフォンの理を応用しゴム管でガソリンを
バーナーのタンクにうつした。その結果ロス
が減り、ガソリン無駄がなくなった。

品名	数量
テント ナイロン 1号	1
ビニロン 1号	1
ザイル 麻 30m	1 .
テリレン 30m	1
補助 30m	1 .
ハンマー	2 .
カラビナ	3 .
ロックハーケン	4 .
アイスハーケン	4 .
エアーマット	7
カポックマット	1
ツェルトザック	2
スコップ	1 .
バーナー	3
ローソク	40 本 .
コッヘル	2
ナタ	1 .
ノコギリ	1 .
グランドシート	1 .
ナベ	1 .
シャモジ	2 .
タワシ	3 .
ガスアミ	2 .
ロート	3
ゴム管 (1.5m)	2 本
修理具	1 組 .
新聞紙	若干 .
赤旗用布	”
ガソリン	28 l .

印は秋に荷上済のもの。
(双六小屋へ)

ガソリン缶としては41缶を用いたが、夏秋の経験により、口のパックを完全にするために、口をハンダで固めその上にふたをかぶせた。これだと運搬中のもれもなく、二ヶ月の間の蒸発による損失もなく良好であった。

総 会 報 告

本年度総会は5月31日（土）六時より記念館前の喫茶店ドリアンにて開催された。篠田先生はじめ、大島・加藤・久保・宍戸・木村・抱・立花・西川・村瀬・森川・一山の諸先輩が出席され、現役とも四十数名という盛況であった。篠田先生のあいさつに続き昨年度活動報告、会計報告、本年度新役員紹介、会規作成についての討議、現役紹介等が行われ、最後に昨年度合宿のスライド映写が行われ午後九時散会

槍 平 新 人 合 宿

（一九五七・十二——一九五八・一）

村 瀬 泰 弘

記録 笠 松 卓 爾

田 村 俊 秀

冬山の様な大きな合宿に、いきなり新人を参加させることには種々の問題がある。それで例年細野でスキー合宿を行い、雪に慣れさせることにしていた。しかし冬山と同時に行われるスキー合宿に現役のリーダーが参加することは、部にとってもリーダー自身にとっても好ましいことではない。事実毎年適当なリーダーが得られず、竜頭蛇尾に終ることが多かった。そこで花やかで誘惑の多いゲレンデスキー合宿よりも、新人にふさわしい冬山合宿を行う必要が感じられ、今回の槍平合宿となった。合宿の前半は赤牛隊と行動を共にし、大野間乗越までサポートし、後半槍平に入った。メンバーは村瀬（L）以下大島、笠松、木村、玉井、田村、尾藤（OB）、関本（OB）。

12月29日 5・00起床。小雪交じりの曇天。8・10中崎橋附近の飯場発。前日のラッセルの疲労甚しく、余った食糧が異常な負担となり、トラックを拾う。10・30右俣出合発、左岸のトラック道をつめて、樹林中の夏道に取付く。ここから関学先発隊の、夏道をほぼたどったと思われるラッセルがあり、地理不案内の我々には大変な助けにな

った。けれども行程抄らず、二、三の者不調を訴える。14・00 白出口、ここで食糧二日を残して他はデポすることにし、急場をしのいだ。進むにつれて谷は急峻となり、せまりくる夕闇と共に降雪激しく、新雪は踏跡を消し、事実上のラッセルで消耗する。右手に岩小屋を発見、関学の先発ここでビバークした模様。16・25 滝谷出合、陰惨そのものの風物に新人連荒涼とした面持。寒気と疲労に沈む一同を叱咤してラムプ頼りに強行。樹林が急に切れ小屋の灯を見る。時に 18・00。ラッセルなければルート設定だけで多大の消耗をなし、ビバークも余儀なくされたであろう。計画の細部の粗雑さがこんな時に露呈する。関学の方がテルモスの茶で我々を迎えてくれた。20・00、尾藤、関本 OB が相ついで風雪の中を到着、両氏疲労の影もない。新人連には良い刺戟だろう。小屋はたちまち陽気になった。

12月30日 曇 7・35 起床、村瀬以下新人、デポ地の荷を取りに、一方、OB 両氏は槍平をつめて偵察。

12月31日 雪 午後の小康に、前日 OB が見定めてくれた小屋から一時間の小斜面に向う。両 OB の指導でスキーの基本を一通り。同所でテントを張り雪中露営の訓練とすることにし、両 OB 大汗をかいて地ならしをしてくれたが、支柱を小屋に忘れる。OB 氏怒り、次いで爆笑。夕食後焚火を囲んで OB の物語、山岳部の沿革、恐怖のビバーク、諸先輩の豪傑伝、心温まる一夕であった。

元旦。朝方の風雪 11・00 に至り突然晴上る。遅きに過ぎるが予定通り槍に向う。尾藤氏残念そうに稜線を仰いで下山。13・10 発。シールをつけての相当のラッセルだが、久振りの晴天と白銀輝く槍穂、笠岳にファイトを燃し、大野間乗越が望まれる地点で昼食 (14・40)。行手に飛驒乗越、あと三時間はかゝろう。天候悪化の兆、下山と決す。帰路、山スキーの醍醐味には程遠く慣れぬ急斜面に新人難渋す。16・30 帰着。今夕テントの関本、大島、田井が入る。アタックの日は、天候の如何に拘らず、一切の用意と共に待機すべきであろう。

1月2日 風雪 停滞。テント交代 (村瀬、笠松、木村)。食糧大量に余る為、食い放題とする。

1月3日 風雪をついて関本 OB 下山、テントの交代に行く。今夕は村瀬、佐藤、田村、夕刻より気温急激に下り、-20℃突破快晴となる。月光の穂高、滝谷、妖気に満ちて凄絶である。

1月4日 (テント) 寒さで眼がさめる。バーナーをつけるとたちまち暖くなる。消すと音を立ててテントは凍る。なんでもないことだが、新人には大きな心理的恐怖だ。(小屋) 最低温度計寒さでこわれていた。-25℃、快晴、本隊は勇躍アタックに向ったであろう。然し我々は下山せねばならぬ。新人の気力はもはや限界である。閉学の後発隊と入れ代りに 11・20 小屋に別れを告げる。16・30 槍見温泉に至る。稜線は荒れ模様となった。



一九五八年度役員

一九五八年度現役のリーダー会メンバーは次の様に決定しました。非常に遅れましたが、この機会に発表します。

チーフ	山本信樹	(工学部 機械 三年)
	兼清喜雄	(" 精密 三年)
	野田憲一郎	(経済学部 三年)
	平田彰	(" 三年)
	米林外茂男	(工学部 応化 三年)

仙丈岳女子冬山合宿

(一九五七・十二——一九五八・一)

一山幸代

此迄、阪大山岳に於いて、男女部員は、ほぼ同一行動を取って来たが、今年度になって、一応女子部員は、別個の行動を取るようになり、涸沢での夏山合宿は、その主旨に添ったものであった。冬山合宿も同じく別個のプランのもとに行われた。現役女子部員のメンバーは殆んど実際の登山活動の機会に恵まれなかった一年生二名、卒試・

就職で多忙を極める四年生二名であったが、冬山の性格上、一年生はスキー合宿に加わってもらい、東京の三枝 OB、松木 OB の参加を依頼してのメンバー四人の予定でプランを進めた。初歩的な冬山の候補地は OB の方からも挙げてもらい幾つかあったが、アプローチや天候から割出した所要日数、ベースとしての小屋の使える所、しかもなるだけ高い所を、といった条件にかなった所として最終的に選んだのは南アルプスであり北沢小屋をベースとして主目標を仙丈岳に置き、余裕があれば甲斐駒、アサヨの往復もすることにした。

十二月の初めに偵察及びボッカを引受けて下さった松木 OB が都合により合宿には参加出来なくなったので、結局三人で決行する事となり十二月三十日、東西から伊那北に落合いバスで戸台に向った。

〔メンバー〕 (リーダー) 三 枝 礼 子 (OB)
(食 糧) 森 川 和 子
(装 備) 一 山 幸 代

〔行動記録〕

12月30日 (曇)

戸台 (9・30) - 丹溪山荘着 (12・00) 発 (1・30) - 平 (2・15) - 北沢峠 (4・15) - 北沢小屋着 (4・30)

戸台川に沿って進むと丹溪山荘迄は殆んど雪もなく、秋山に入る感じ。睡眠不足からの疲れもあってコンディションの良くない者もあったが、丹溪山荘で休憩の後、預けてあった米と野菜を加え、パッキングを終えて強行。八丁坂の下部はスケートリンクのように凍っていて一步一步足元に注意しなくてはならなかった。ベースに予定していた県営小屋は見えそうにもないので番人の入っている長衛小屋に変更する。

12月31日 (晴)

小屋発 (6・40) - 三合目 (7・50) - 小仙丈 (10・15) - 小屋着 (12・10)

今度の合宿の主目標である線上に向う。森林の間はまるで春山のように晴朗だがアイゼンをつけて稜線にかゝると雪を吹きつける風が烈しい。ともすればバランスが奪われがちであり三米前にいる者に掛ける声も吹き飛ばされてしまう。その上小仙丈の附近迄行くと一人がプロテクトの不十分な所為か顔面に凍傷を起しかけたし全員南アは初めてなので慎重を期し引返す事にする。

1月1日 (快晴)

小屋発 (7・20) - 三合目 (8・20) - 仙丈岳ピーク着 (10・50) 発 (11・30) - 小屋着 (1・30)

今日こそはと意気込んでプロテクトにも十分意を払う。小仙丈からの稜線はいささか長い感じもし、同時にその緊張を終止するのが惜しいような気もする頃最後の登高となる。快晴に恵まれたピークから展望する雪の中央アルプスは遠い時代の夢のようにリリーフされている。

1月2日 (風雪)

小屋発 (7・30) - 仙水峠着 (8・55) 発 (9・05) - 小屋着 (9・50)

明け方から雪が降り続けているが偵察を兼ねて仙水峠まで行く事とする。次第に風雪気味となってくる中を仙水峠に着く。ガタガタ震えながらテルモスの紅茶を呑む一〇分ばかりの休憩の間に先刻のラッセルは跡形もない。三枝 OB は御自慢のナイロンのオーバー・ズボンの威力で先頭に立って、腰迄もぐりながらラッセルを続けて下さる。私達はさすがに OB だとそのリーダーシップにともつかず、そのオーバーズボンにともつかず、しきりと感心する。

1月3日 (風雪)

停滞

1月4日 (快晴)

小屋発 (7・15) - 仙水峠 (8・05) - 駒津着 (9・20) 発 (9・30) - 六方石 (9・50) - 駒ピーク着 (10・50) 発 (11・30) - 六方石着 (12・20) 発 (12・45) - 駒津着 (1・00) 発 (1・07) - 仙水峠着 (1・30) 発 (1・37) - 小屋着 (2・00)

甲斐駒に向うパーティも幾つかあり私達は思っていたよりも容易にピークに立つ事が出来た。往路は駒へ岩稜を直登、帰路はピークと摩利支天の鞍部からトラバースする。

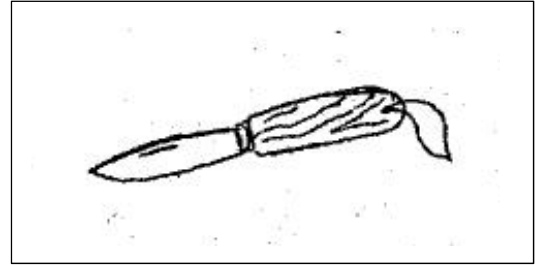
小屋へ帰ってからは野呂川に沿ってスキー沢あたり迄散策を楽しむ。

1月5日

小屋発 (7・00) - 八丁坂着 (7・45) 発 (7・55) - 丹溪山荘着 (8・15) 発 (8・20) - 戸台 (10・30)

女子部員のみによる初めての初歩的な冬山合宿であったが、男子部員に依存的だと評されがちだっただけに、私達自身の手で計画を立て、私達自身の力で、初期の目標

を達成し得た喜びは一しおである。この合宿によって学んだ事や反省すべき事は多いけれどこの経験を生して今後とも自主的な山行をなしたいと思ひます。そのためにも技量の未熟な私達に男子部員の方々の適切な指導と助言をお願いします。



一九五七年度 春山合宿

天狗尾根より極地法による五竜岳および爺岳

(一九五八・三)

兼 清 喜 雄

冬の赤牛岳へのラッシュ攻撃が成功裡に終り、四年部員がいなくなり部は実質的に二年一年で部員で行動しなければならなくなった。

計画がはっきりと決つたのは一月に入ってからであり我々の積雪期の経験は二年部員の一部だけであり多くの一年部員を動かす事が出来、しかも二年部員にも満足して行動出来る所としてポーラによる鹿島槍天狗尾根から五竜を選んだ。この尾根は、五四年の冬に合宿の行われた東尾根の上部から分れている尾根で途中で数ヶ所の悪場があり頂上までテントを上げる場合相当に困難が予想された。又合宿の決定が非常に遅く文献による知識だけであつた。

具体的には丸山小屋を BH とし C1 を二〇五〇にナイロン二号テントと雪洞で建設し C2 を北俣コル附近にビニロンテントと雪洞で C3 を北槍頂上又は釣尾根にナイロン一号で設置する事にした。天候は一週間で 3.5 日動けるとして、計画日数十八日で行動日九日としアタック前後で計画に巾を持たせる様にしアタックは C3 設置後いかなる場合も五日で放棄する事にした。

今春は天気が入山中良好で目標の五竜アタックが成功裡に早く終わったので次の日すぐに C2 より爺ヶ岳アタックを出しこれも成功した。又今度の計画では一、C1C2 で雪洞の使用、二、食料装備の完全パッキング (キャンプ毎)、三、荷上げの合理化 (各キャンプ毎に荷物を数等分)、以上三つを完全に実施した。

参考文としては岳人、鵬翔山岳会「鵬翔」一〇一号及び吉田二郎著「鹿島槍研究」を参考にした。

メンバー

兼清喜雄 (L)、山本信樹 (装備)、野田憲一郎 (食料)、米林外茂男 (装備)、平田彰 (会計)、大島浩、田村俊秀、佐藤茂、笠松卓爾、広瀬貞雄、大工原恭、村井忠雄、平野恵一、黒田祠郎、横尾由松、岡田博司、広橋茂 (OB)、西川元夫 (OB)

○行 動 概 況

3月17日 十八時九分大阪発の列車で本隊十五人出発、食料が一斗カンとカートンボックス全部で三十二ヶ約六十貫であった。車の乗換時荷物の数が多いので非常に苦勞した。

18日 (晴後曇) 源汲でバスから放り出され、荷物を約半分民家にあずけ他を全員でかついで出発、途中鹿島で狩野さんの所により丸山小舎に入る。岡田さんが後から来られた。丸山小舎はあまり大きくなり市大が入っており一杯でどうにか全員ねれる様な状態であった。

19日 (晴後高曇) 十人がC I建設に向い、6人が源汲に荷物を取りに下った。天狗尾根は今春多くのパーティが入っており天狗街道と云えるほどの道が出来たぐらいでほとんどラッセルがなかった。C Iは最初の予定では二〇五〇のあたりであったが雪洞の大きなのを作ることとを考慮して一八〇〇の附近の林の中に設置しナイロン二号は使用せず雪洞のみとし阪大式で北側の斜面に一つ三人用 (後に炊事用) のを作り今一つはできるだけほっておいた。C IにはC IIまでのルート工作隊として、岡田、山本、笠松が入った。C Iへのサポート兼清、平田、大島、佐藤、田村、広瀬、平野、源汲へは野田、米林、大工原、横尾、村井、黒田。西川 OB 大阪発。

20日 (小雪後晴) 今日はC IへC II建設のため五人が入る。又ボッカも今日と明日でC I以上のものを全部C Iへ上げねばならぬので今日は重要な日である。出発前に西川 OB が到着され全員十四名で出発する。九人のボッカ隊であるので相当量の荷が今日一日で上る。C Iでは西川 OB の指導により約十人用の大きな雪洞が完成した (BH-C I)、兼清、平田、野田、大島、田村、C I隊はC II予定地北俣のコルまでトレースし、第一第二クロアールにフィックスを行いC IIの位置としては北俣のコルに良い所がなく天狗の鼻が適当地である事を偵察して来た。又第一第二クロアールは予想よりも長くフィックスは共に上半分だけが行われており、明日下半分を継ぎたさなければならぬ。広橋 OB 大阪発。

21日(晴) CII建設の日である。非常に暑い太陽の下を八人のCI隊員が天狗の鼻めざして雪のクロアールを越しナイフリッチを通り急斜面をあえぎあえぎ登っていった。CIIは天狗の鼻の一番先の○にビニロンテントが張られ雪洞が一部掘られた。○の九人はのこりの全荷物を持って全員がCIに入った。CIでは雪洞の居住性を良くするためにあちこちと手がくわえられた。第一第二クロアールのフィックスでフィックスザイルのほとんど全部を使用し、CII-CIII間に多くの悪場があった場合の事が心配されるが明日の偵察にまかせる事にする。OB 広橋氏 CI着。CII隊山本、野田、笠松、大島。

22日(曇) 入山して今日で五日目である。この様に天気が続くと計画は順調にすすむが体の方はそろそろ停滞をほっする様になって来る。CII隊はCIIIまでをトレースし途中二ヶ所岩場にフィックスをしCIIIとしては北檜頂上より釣尾根の方がよい事を見て来た。一方CIからは十人のサポートのもとに四人のCIII建設員とCIII用CII用の荷物がCIIに全部入り、CIの荷上げに関する仕事は終わった。又CIIのCIII建設までの一時的な四人用の雪洞が昨日一部掘られていたが今は完成しCIから上って来た四人が入った。CII先発隊の偵察の結果二ヶ所の岩場もそう悪くはなく明日の荷上げはかなりスムーズに行くであろうと云う予想が立った。(CI-CII 兼清、米林、田村、広橋OB)

23日(快晴 強風) アタックへの最後のステップCIII建設の日である。非常に風が強く北俣のコルから上の一連の急斜面を登る四名のCIII隊員及び四名のサポート隊員は非常に苦しめられる。がしかし昨日のトレースを岩場のフィックスによりスムーズに進み、午後一時には釣尾根のCIII予定地に着いた。又CIの十人も早朝CIを出発し北檜頂上を全員ふむために上って来たが小舎岩の所で体の調子の悪い二人を残して他は全員釣尾根のCIIIまで上って来た。CIIIは釣尾根の一番北檜に近い所で冷沢側にナイロン一号が張られた。

CIII(アタック隊) 山本、野田、米林(サポート) 田村

CII隊 兼清、広橋OB、笠松、大島

CI隊 平田、佐藤、広瀬、大工原、横尾、村井、黒田、平野、西川OB、岡田

24日(晴 微風) CIIIのアタック隊は五竜アタックに成功した。雪の調子によっては一日で往復不可能なこの稜線も非常に快適に歩くことが出来た。

(アタック隊記録参照)

アタック隊が五竜をアタックしている間 CIIより CIIIの田村の所に連絡に行き北槍頂上-CII間の発行信号と明日の CIII撤収を打合せし爺アタックの事を伝えた。CII隊員と CIII-田村は南槍頂上を往復した。夕刻雪がしまってから CIより CIIに連絡に佐藤、広瀬が上って来たので発行信号の事と明日の CIよりの CIII撤収、CIIからの爺アタックを伝える。爺アタックはリーダーの兼清が体をこわしたため広橋 OB に行ってもらふ事とし、広橋、笠松、大島である。

西川 OB、岡田 OB 下山。

25 日 (曇後吹雪 ガス) 天気はあまり良好ではないがこの一週間の調子から見て今日も一日保つかもわからないので一応アタックを出す事にした。アタックの隊は帰途南槍の登りから吹雪に出会った。

これについてはアタック隊報告を参照されたい。

一方 CIIIの撤収は CIから 6 名のサポート隊員が上って行き、計十人で CIIIを CIまで撤収、なほ天気悪化のため、爺アタックのサポート隊として二年部員の山本、野田、米林、平田は爺アタックが帰って来るまで CIIにとどまったが無事アタック隊が四〇〇に帰って来たので山本、米林、野田は CIに下り CIIは爺アタック隊と平田、兼清の五名となった。なほ爺アタック隊は CIIICII間のフィックスザイルをはずして下って来た。アタックは成功裡に終了後は CII以下の撤収だけである。一応皆肩の荷が降りた様な感じだった。平野、黒田下山。

26 日 (晴) CIよりサポートに四名が上って来て CIIを撤収し、第二第一クロアールのフィックスザイルをはずして CIまで下り CIで CIをほとんど撤収して待っていた他の部員と一緒に BH の丸山小舎に降りた。今日は雪の状態が非常に悪く足もとの雪がスノーボールとなって落ちて行くとそれが表層ナダレとなるという状態で第一クロアールは撤収して来る寸前になだれていた。今日は遅くまでかかって用意しひさしぶりに米の飯をたべた。

27 日 (高曇) 毎日行動が出来一日も停滞がなくしたがって食料等は半分はあまってしまい帰りにも行きにおとらぬ荷があつて丸山小舎から源汲までくるしめられた。

あとがき

今度の山行を反省して見ると知識の不足による準備の不完全さもあったが天気にもめぐまれ順調にキャンプを設置出来、爺か五竜か一方だけを考えていたアタックも両方行く事が出来、今春の目標であった新人部員の雪山に対してのトレーニング及び二年部員のリーダー的な行動のトレーニングの目的は十分に果たされたと思っている。計画実行に対して不備な点は多くあったと思うが皆よくポーターの方式にしたがい協力して動いてくれた事により計画が成功したのだと思う。又三年部員が欠けている所をOB多数の参加により多く教えられる所があったと思う。

時間記録

3月18日

6.35 大町 7.10^{バス}—7.35 源波 9.30—11.10 鹿島部落 11.30—2.00 丸山小舎

3月19日

5.00 起床—8.30 出発—10.15 取つき—1.20C I 4.20—5.15 取りき—6.20 小舎着

9.25 発—10.05 鹿島—11.35 源波 1.10—4.00 小舎 5.15—5.55 鹿島 6.05—7.05 小舎着

3月20日

5.00 起床 (炊事) 9.30 発—11.15 取つき—2.15C I 着—C I 発 3.10—小舎

3月21日 C I →C II

6.00 起床 8.45C I 発—1.15C II 3.50—4.45C I 着

3月22日 BH→C I

6.00 起床—8.30 発—11.20C II 11.30 発 (1.35) —C I

C II →C III —3.45C II 着

3月23日

5.30getup—9.00 出発 10.25 小舎岩—10.55 第二の岩場上—11.40 荒沢の頭 12.30—1.50

頂上—1.00 釣尾根 C III 3.00 頭—3.40 第一岩場下—4.10C II

C I —C III

3月24日

五竜アタック

C II →C III—南槍 11.00 発—11.50 第一岩場下—12.10 第二岩場上—12.20 荒沢の頭

12.55—1.05 北槍上—1.40C III 発—1.55 南槍上 2.15—2.30C III 3.00—3.15 北槍上—3.25 第二岩場—3.40 小舎岩—C II C I →C II

3月25日

爺アタック 6.00CII発

—4.00CII着

CI→CII CI発—8.00CII9.00— —1.30CII

アタック隊報告

◎第一次アタック行（五竜岳）

朝四時半起床する。テントキーパーの田村はぐっすり寝ていて、山本が起こしたらしい。急いで朝食をとり、オーバーシューズ、アイゼンなど身支度をしてテントをとり出し出したのが五時十五分だった。大町のあたりも昨夜美しく見えた灯も今はなく静かに眠っている様だ。ヘッドライトをともし釣尾根からすぐ黒部側の急斜面を明りをたよりにおりる。岩の上にさらさらの雪が積っておりもぐるつもりで足を突っ込むと、がちんとはねかえってきて甚だ安定が悪い。少し下ったところで山本がスリップし約30m程流されたが事なきを得た。10分程下ってから今度はトラバースをして稜線へ出る。このあたりは雪は表面が薄くクラストしており甚だ歩きよい。快調に飛ばして30分程でキレットへ着くキレットは心配していた程のこともなく鹿島側は夏道が出ており、どん底から五竜側は急な雪の斜面をよじのぼった。

キレット小屋には九州大学の方が入っておられ附近にはザイルフィックスがありそれに助けられた。それから五竜迄は例のとおり凹凸の多い岩と雪のミックスした稜線だ。天候は晴れてはいるが余りすっきりしない空の色で剣は高曇の様だった。信州側にはり出している雪庇はもう根元に割目が入っている。

五竜迄大体トレースがあったので非常に楽だった。五竜岳頂上10時過ぎ。帰路はかなりとぼし釣尾根のテントに午後3時帰着。 (米林)

◎第二次アタック行（爺岳）

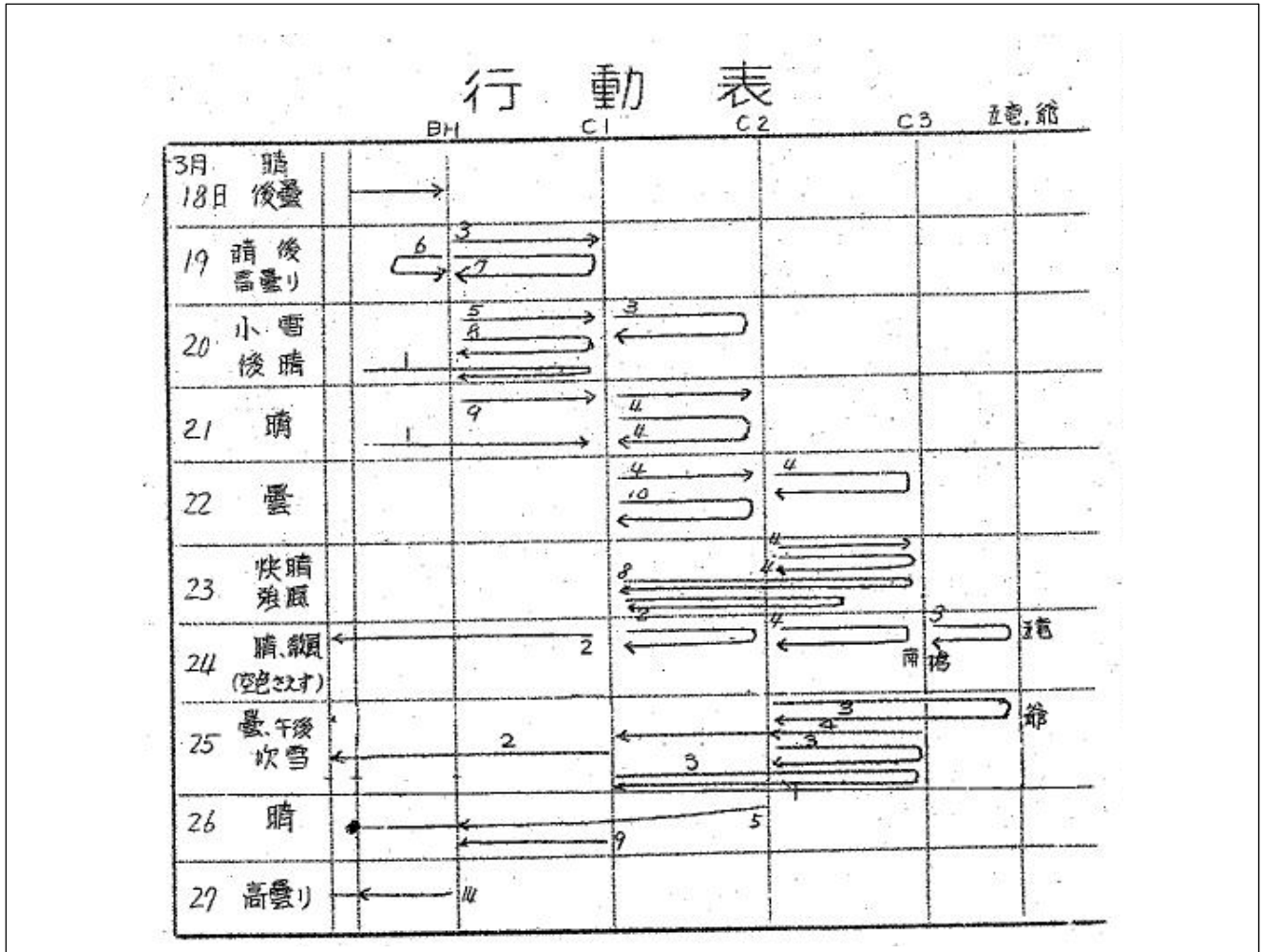
高曇 4.30 起床、6.10 出発、7.15 荒沢岳、7.30 北槍、8.08 南槍、烈風有り
9.60 冷池小屋、10.20 爺岳頂上

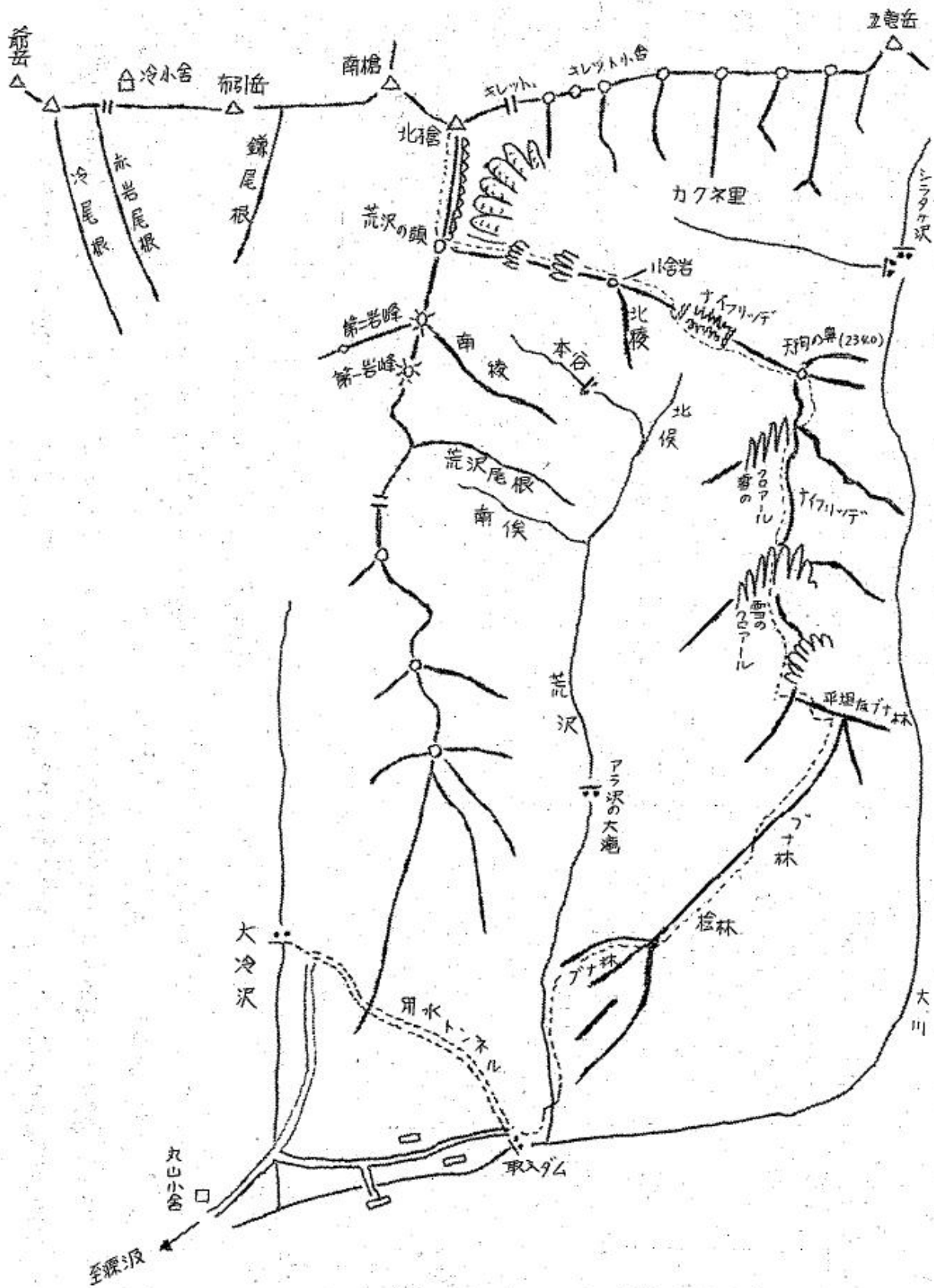
往路は南槍から夏道が良く露出し、加えトレースがついていたが、爺頂上附近では消失していた。ルートは雪庇を警戒して黒部側の林よりに取った。風強まる中、ツェルトを被ってつゝましく朝食をとり、11.20 出発、12.00 冷池小屋、ぐんぐんと剣にガス。13.20 南槍ケルン。ガスの流れ繁く、北西視界なし、北槍かすかに見え疲労覚ゆ。

釣尾根にかゝる頃より風雪となり僅かに北槍の赤旗が見えかくれする程度で頼みのトレースは新雪に埋もれ不安を感ずる。14.15CIIIテント地、撤収済。剣にガスが懸れ

ば、後後の天気は30分後に崩れる。という話を改めて思い出す。やせ尾根から思はず足を踏み出しそうになるが奇妙に危険感がない。荒沢頭からの広い雪面は風雪の中の赤旗だけが頼り。

16.00 CIIに帰りつく。天候を心配してキャプテン以下 CIIIのメンバーが我々を待っていてくれた。
(笠松)





天狗尾根 概念図 (吉田二郎氏 鹿島槍研究より)

食糧報告

野田 憲一郎

春の天狗尾根は現役部員にとって初めてのポーラーだった。だから、ポーラー運営に際して食糧計画をたてる上でどのようなことが問題になるか殆んどわからず、手元の文献を読んでも私には十分な知識は得られなかった。そこで、新しい問題が起った場合にはそのつど、それを取り入れることにした。

そこで、ここでも私が考えて行った順に述べたいと思う。

献立は量に就ては、ポーラーに於ては兎角荷物が多くなり勝ちだと考え、又、冬には可成り一食分の分量が多かったような印象を持っていたので、ひかえ目にしたところ、完全に十分とは云えず、特に下の方では不十分だ。

次に献立て表の作成に就て述べたい。これが今度の食糧計画で特に目新しい点だと思いが従来の、そのキャンプに割合てられた食糧を適当に使って行くという方法ではなく、各キャンプ毎に「何日目の朝の献立はこれこれ」という具合に厳密に規定し、これを符号で表わし一らん表を作成して全員に配布した。

従って食糧係は何処に居てもどのキャンプに何がどれだけあるかを可成り正確に把握でき又炊事に際してまごつくことの少なかったのは一応成功だったと云えよう。(具体例に就ては注を参照)

なお、パッキングは、全部ブリキ缶を使い、原則としてカートンボックスは廃した。缶の外側には目録を張り混乱を避ける爲、BCには黒、CIは青、CIIは茶、CIIIは赤で色分けした。

こうして出来た食糧は総計五八貫で図の如くである。但し時に各キャンプに必要なものを上げられないことを予想し、CI用の三十一貫を四回に、CII用十四貫は二回に分けて荷上げできるようパッキングした。

この爲一回の食事の準備に三つも四つもの缶のフタを開かねばならないという不手際は避けられた。

BC		4box	7貫550
CI	1回	5	8.250
	2	5	9.600
	3	3	7.200
	4	3	5.700
	計	16	31.000
CII	1回	4	6.800
	2	4	7.200
	計	8	14.000
CIII		4	6.400

これと同時に、各缶の重量の均一化という問題が起ったが、準備期間が短かったせいもあり、解決し得なかった。その為可成りの不均衡があり、現地での負荷調整に苦勞した。

実際に山に入つての結果は、すでに述べたように全体として分量不足勝ちであつたこと（これは予定された停滯が無かつたのでその分を適当に使つて補つた）。クラッカーのおかずが粗末で不評であつたこと。

C I の人数が多過ぎて餅が仲々煮えず炊事に長時間を要したこと、飽きないように目刺しと味淋干しを併用したのがかえつて繁雜化したこと、等の基本的な失敗の他に様々な技術的な面での不満があつた。又献立ての指定も現段階以上に細かくすると精密であるが爲にかえつて混乱と不正確を招くことになる恐れがある。

これらのことは今後の合宿で次々に解決して行くべきことであり、この立場に立つて、我々の食糧計画の相対的な未熟さ早急に取戻し一定の水準にまで引き上げる爲、部全体の批判と努力が加えられなければならない。

要するに極地法とは、食糧計画を手際よく運営することである、と云うことを改めて悟つた次第である。

注 献立表について

まず、行動表に基いてキャンプ毎の毎日の夜の分の人数を表にした。（表 1）日付は停滯のない場合に予定される日付で行動表と一致している。日番というのは、模型的に停滯を C I では二日に一回、C II 以上では三日に二回とした場合、何日目であるかを示したもので、従つて例えば二十一日、二十二日とつづけて行動できた場合、六日目の翌日は九日目というわけである。又、夜の人数を書いたのは、例えば二十一日の夜と二十二日の朝、昼は人数が同じであることを意味する。（キャンプの人数は昼間に変動する）。

以下 C II に例をとるとまず食事の組合せを作つて記号化した（表 2）。

次に行動、停滯のそれぞれの予定日毎に献立表を作成した（表 3）。行動日は四食、停滯日は三食とした。行動日に第 III 食から始まっているのは、そこから翌日の第 II 食迄、人数に変更がないからである。又、行動のつもりで朝食を作り、その後で停滯に変更しても主食に狂いが生じないよう、例えば第六日の I 欄（すなわち第九日の朝食 $= B' + a + C$ ）を使った後で停滯しても、主食の面からみれば第七日の I によていされた $B' + C$ と結果的に同じになるように組合せた。行動日にせよ、停滯日にせよ、一日に同じものを二回食べなくてもよい様に組んであるのは勿論であるが、このことは C

IIの表だけからは分らないが、キャンプを変わった者も一日に同じものを二回食べないようになっている。

この他に各献立毎に使用する材料内容、人数と材料の量の関係の表、各キャンプ毎に荷上げされた材料の種類と量の表、及正誤表をプリントして全員に配布した。

各々の缶の内容と目方に就ては缶に表示してある他、三通のコピーを作って食糧係三人が管理した。

献立一覧表作成例 (CIIを中心として)

表1 人数表 (夜)

日付	日番	状況	BH	CI	CII	CIII
18	1		16			
19	2		13	3		
	3	停	"	"		
20	4		8	9		
	5	停	"	"		
21	6			14	4	
	7	停		"	"	
	8	停		"	"	
22	9			9	9	
	10	停		"	"	
	11	停		"	"	
23	12			4	4	4
	13	停		"	"	"
	14	停		"	"	"
24	15			"	"	"
	16	停		"	"	"
25	17			12		(予備4)
計			60	125	59	24

表3 CIIの献立表

行	日番	人数	CII		翌日	
			III (間)	IV (晩)	I (朝)	II (昼)
動	6	4	E	C+d+b	B'+a+c	G
	9	9	H	A+b	C'+d	F
	12	4	E	B+a+d	C'+b+c	G
	15	4	E	B+c+e	B'+a+d	F
停 滞			I	II	III	IV
	7	4	B'+c	E'		C+a
	8	4	A+d	G'		B+b
	10	9	C'+d	E		B+a
	11	9	A+d	F		C+b
	13	4	C'+c	E'		B+a
	14	4	A+d	G'		C+b
	16	4	B'+d	H		A+a

表2 CIIの食事内容

A	カレー+そば	E	ミルク、ジャム、クラッカー	a	福神づけ
B	コンソメスープ+そば	E'	紅茶、ジャム、クラッカー	b	らっきよ
B'	" +餅	F	紅茶、チーズ、パン	c	目刺し
C	ポタージュスープ+そば	G	紅茶、レーズン、パン	d	味淋干し
C'	" +餅	G'	ミルク、レーズン、パン	e	みかん缶
		H	ジュース、チーズ、クラッカー		

一九五八年度冬山春山合宿

本年度の冬山および春山合宿計画が次のように決定いたしました。先輩諸兄も何卒ご参加の上ご指導ください。

○冬山合宿

涸沢岳西尾根より北穂高岳および奥穂高岳

期間 12月24日－1月10日 チーフリーダー山本信樹 (T3)

蒲田川右俣、白出沢出会附近にBCを置き、涸沢岳頂上にCⅢを設営して北穂および奥穂へアタックを行う予定。

○春山合宿

黒部上廊下横断

期間 3月上旬－四月上旬 (チーフ山本信樹)

懸案の黒部上廊下に向うことになりました。計画は大町より烏帽子小屋を経て赤牛岳に達し、赤牛左尾根よりスゴの出合ースゴの頭に達するもので11月に一応このコースの横断に成功し又烏帽子小屋には相当量の装備食糧をボッカ致しました。

一九五七年度

夏山穂高合宿報告

岡 田 博 司

昭和三十二年度の新入部員数はかつてない程増加した。このことは直ちに夏山合宿に影響し、参加者総数三十四名という合宿になった。このためのテントが不足し殆んど使用に耐えぬ、バカ天までも動員し、体育会からも一部を借りて間に合わせた。

計画の概要は、合宿用の荷物を全部かつぎ徳本峠をこえる。これは喧噪な夏の上高地をさける意味と、又非常に良いトレーニングになると考えたからである。そして横尾にBCを置き、全員で涸沢を中心とした岩登りと雪渓技術の練習をし、その間一時二年以上の部員は奥又池畔にACを出して、前穂の東壁などを登り再び全員が横尾に集まってから解散し縦走に移る。大体この様な計画で、上級部員のみが別行動するの

は以前から問題であったが、初めての試みである。出発は、多人数がまとまって設営できるよう、例年より数日早く、七月十五日とした。

メンバー

岡田 (L)、山田 (SL)、樋下 (SL)、大井、森川、渡辺、飯田、乾、山本、兼清、野田、平田、米林、平野、田端、木村、田村、大島、笠松、玉井、三宅、佐藤、田井、廣瀬、村井、梶山、小野、今井、横尾、井畑、黒田、宍戸 (OB) 他に産経新聞記者二名参加

7月14日に先発3名が松本に行き、米、野菜、及びトラック運送の準備をした。

7月15日 本隊が大阪発、翌日大阪を発つ者も3名いた。

7月16日 早朝松本に着いてトラックで荷物を島々迄運ぶ。縦走用の荷物のみトラックで運び、合宿用の荷物は担いで徳本峠をこえる予定だったが、島々で、上高地迄の道路の不通箇所が復旧していないことが判り、全部を担いで徳本越ということになった。荷分の結果、一人当たり12貫-13貫となり、島々谷を登ったのである。

この結果、翌17日に徳沢を出た頃には日はとつぷりと暮れてしまい、一日後からバスで入った部員に迎えられて横尾のキャンプ地に到着したのは九時半で他のテントがそろそろ眠りについた頃だった。

7月18日 あまりはっきりしない空を気にしながら涸沢へ行き、雪溪でグリセードの練習を行った。一時相当に強いわか雨があり、朋文堂ヒュッテの仮設テントに逃げ込んだ。

7月19日 朝から雨で停滞したが、パンの梱包などが湿ってしまった。

7月20日 二年以上の部員が奥又白の池にテントを出す日である。岡田 (L)、樋下、大井、乾、飯田、山田、兼清、山本、野田の9人は新人のサポートを受けて中畠新道から奥又白の池へ入った。松高ルンゼは上部でガスがかかり、雪溪はズタズタに切れてすざましい様相を見せていた。

奥又白の池には大阪工大、神戸大等のテントが張ってあった。降りしきる小雨の中でドロドロの粘土の上にテントを建てた。二張のテントは離れていて、相互の連絡は不便だった。

7月21日 天気はどうも思わしくない。昼近く天気が回復してきたので岡田は横尾へ下り、二名がテントに残り、あとはA沢-前穂へ登り、三名づつに分れて明神四峰

往復と北尾根縦走を行った。北尾根パーティは五、六のコール-奥又本谷経由、明神パーティはA沢を下った。

7月22日 曇っていたが、回復したら四峰明大ルート、B、Aフェースなどを登らうと六人でB沢を登った。だが四峰の下へ来ても全く見通しが効かず、四峰の登攀は断念して全員でズタズタに切れかかったC沢に入った。B沢には大きなクレバスがつづき、簡単に登れそうには見えなかった。インゼルの上端でトップが死体を発見したが、これは後に日本アルコウ会の遭難者とわかった。ピッチを上げて、三四のコールに上ると二十人程の人々が集っていた。北尾根を縦走中三峰から転落されたとのこと。御冥福を祈って折からの豪雨の中を五六のコールへ向った。コールから下り、一人が転倒して手などに軽傷を負った。グリセードの失敗である。ACへ帰ると、横尾から宍戸OB及び平田が連絡に来ていたので、負傷者を連れて帰ってもらった。

一方横尾に残ったメンバーは

7月21日蝶ヶ岳より常念岳、一の俣縦走を行う、天候は晴れてはいたが穂高は上部はガスに隠れていた。常念迄は何のことはなかったが、一の俣の下りはかなり悪かった。

7月22日本日は奥穂往復天候は朝から思わしくなくザイテングラートから穂高小屋につくと、激しい雨となり頂上の展望もきかず一同ずぶぬれで帰る。

7月23日 奥又白のACを撤収し、横尾に下ると。涸沢にテントを張っていた女子部員の一人が北穂付近で足に負傷したという知らせが入っており、くわしいことがよく分らないので、奥又白から下って来た三年生が岡田(L)と共に涸沢に上った。他の部員は久しぶりにちらちらとのぞく青空にシュラフを拡げていた。宍戸OBは大阪へ帰る。

7月24日 合宿最後の日、涸沢との連絡を兼ね、どうやら一日もちそうな空模様の下を全員で北穂に登った。途中で下ってくる女子部員に出合い、大したこともなかったことを知った。滝谷はその険悪な様相をガスの間に隠見させていた。

奥穂の小屋の前で全員は二パーティに別れ、そのままBCへ帰るメンバーを見送って8人が奥穂の頂上へ登った。そしてグリセードで涸沢に下り、BCへ帰ったのである。

晩は最後なので食べきれぬ程ぜんざいを作り、キャンプファイアを囲んで歌を唱って合宿を終えたわけである。

この合宿では梅雨の終りが例年より遅れ、終に一度もザイルを結ぶことはできなかつたが、それなりに我々は新しい経験をした。我々はこれを足場としてより優れた山行をするように努力し、この合宿で得られた成果を生かして行きたいものである。

特製パンについて

野田 憲一郎

赤牛岳の登頂の為には、全ての面に於て軽量が主目標とされていた。そこで当然、主食の大部分を占めたパンについて、特にこれが要求された。

パン一五〇食は秋に荷上げをし、冬までの二ヶ月間双六小屋に貯蔵されるのであるから、この長期間に変質しない、ということも重要なポイントの一つである。

幸い、神戸屋パン K.K.の御好意により、次のような条件のパンを使用しえた。

- (i) パンを堅焼きにすることにより軽量、小体積、変質変形しにくいようにする。
- (ii) パンの形をできるだけ直方体に近くして梱包時の無駄な空間をなくす。
- (iii) 水無しでも食べられるように、又多量に食べても飽きないように適当な味をつける。
- (iv) 有効な添加物を多く入れ栄養価を高める。
- (v) パン一個又は二個宛袋に入れて清潔と分配の便を計る。

そこで次ぎのようなパンを試作した。

- (a) パンの配合の検討——脂肪を強調したもの。乳製品を多量に含んだもの。砂糖を多く含んだもの。の三種試作した。
- (b) 防腐試験 三種の試作品を、ポリエチレンの袋に入れて、冷蔵庫に三日間入れ、カビの発生状態を調査。

砂糖を多く含んだものはカビが発生しにくいだが、焼く時に表面がこげ易い。

乳製品を多く含んだものは、中には40%の糖分が含まれているし、又味も良い。

結局、実験が短時間だったので、満足な成果は得られなかったが、乳製品を、多く含んだものを、えらんだ。

(c) この配合で、低温で長時間にわたって焼き、もっとも水分の少ない時期に一ケずつポリエチレン又は硫酸紙の袋に入れ、これを 60 個ずつ更に二重のポリエチレン袋に入れ、シリカゲルと共に密封した。これを、カートンボックスに入れた。

これを、11月2日及び3日に双六小屋に荷上げした。又コントロールとして、神戸屋製の食パン、アメリカンブレッド（食パンの一種）、コッペパン、牛乳パン、ウインナーロール、ホンスロール、おぐらパンを選び、同じように梱包して、2ヶ月の保存に耐えるかどうか荷上げした。

結果としては

I 肩さも水無しで食べるのに適当。カビもはえてないし、品質の変化もなく味も良好だった。

II 形も行動中にたべ易い。

III 量は、1食2ケを用意したが、1.5本でも充分。停滞は一ケでも充分。

コントロールのパンについて

一般に、凍って少々固くなっているが、充分そのままたべられる。食パンも、トーストにすると新しいのとほとんど味も変わらない。カビもない。牛乳パンの中の牛乳が少々醗酵していた様な味がしているのを除いては、試作品とのちがいはないといつてよい。

なお、双六小屋に荷上げしてから、使用する迄、気温が 0℃を越えた日は無いものと考えられる。

この試験は、今後も続行したいと思う。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

◇ 冬用テント製作報告

◇

宍 戸 元

前回までに作製したナイロン製テントは、内外の遠征隊の記録を参考にしたり、私たちの経験を加えて、阪大独自のテントを設計してきた。そのためか、支柱の接合部など、規格にない部品があるため部品の故障、紛失の場合など、かえって不便の面が大きかった。

それで今回はあまり新しい考えを加えないで、もっともオーソドックスなミード型テント（外張り式）を作った。大きさは布地をもっとも経済的に裁断できる大きさを考えにいれて、テントの幅、奥行、高さを決定した。

支柱はジュラルミン（三本継）を用い、接合部は市販のもの（図参照）を採用し、中央にフレームを入れた。布地はナイロンより重量はあるが、耐久力と、雨に対する防水の面をも考えてビニロンを使った。色はオレンジである。

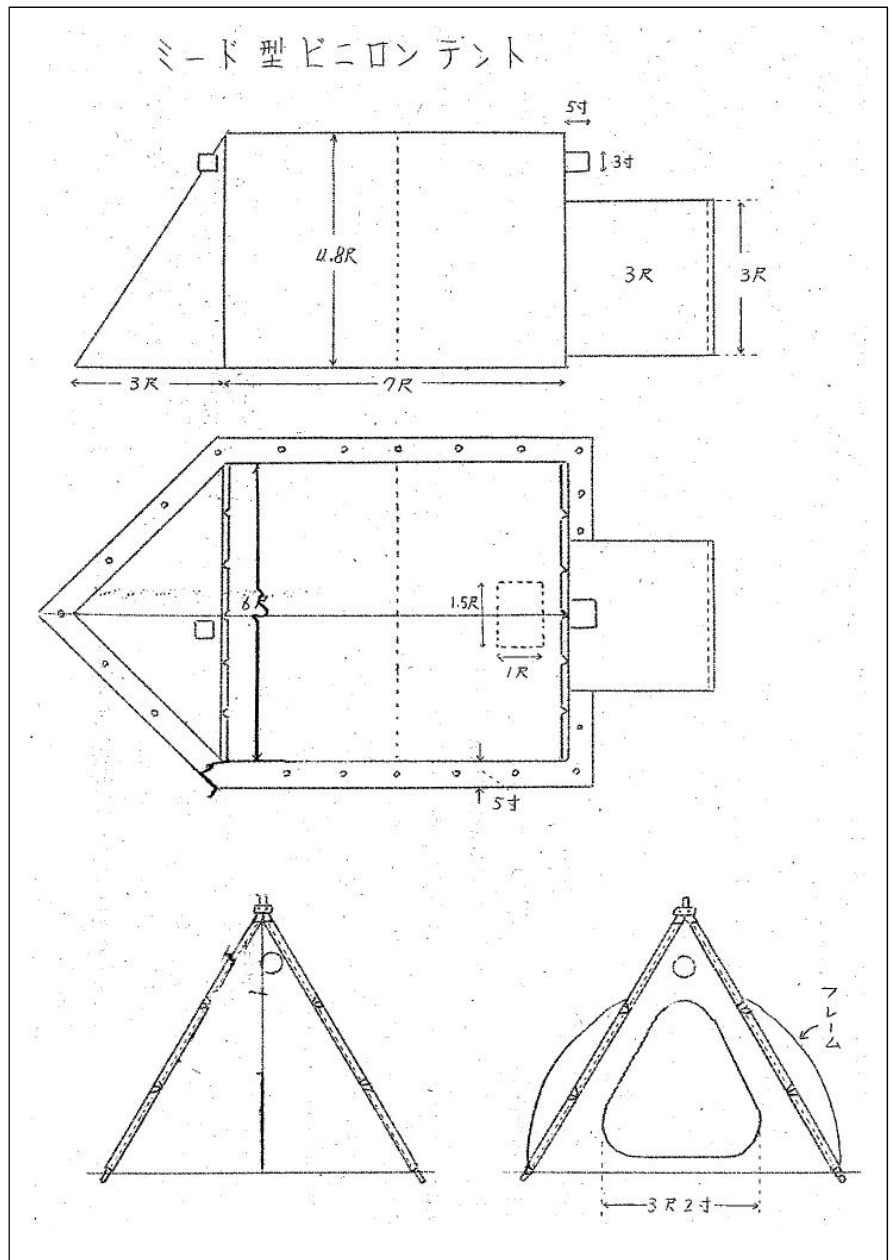
冬山（三俣蓮華岳）、春山（天狗尾根）、五月山行（赤沢）で使用した長所、欠点はつぎの通りである。

①三本継ぎの支柱は運搬が容易になった反面、テントをたてる場合に、支柱のサヤも細いのも手伝ってテントをたてるのに苦労した。

②フレームは、阪大のテントとしては初めての試みであるが、内部が広く使える上、横からの強風に対し安定がよい。

③入口、小さすぎる。四・五人用のこの種のテントでは二人揃って出入りできることが必要だと思うが、メーカーとの連絡不十分で最初の計画通りいかなかった。

④ナイロン二号テントと同様、三角張出しの後室を設けたが、居住性を良くする意味で、今回も非常に好評だった。



一九五七年度

一般山行報告

◎富士山（4月27日～5月1日）

山本 (L)、米林、平野、田中

4月27日 大阪発

28日 (曇、小雨) 富士宮 (5.22) - 一合五勺 (10.00) - 六合目 (4.30)

29日 (快晴) 出発 (8.30) - 八合目 (11.00) - 頂上 (13.10) - 五合目 (5.30)

30日 (快晴) 出発 (8.00) - 吉田 (10.40) - 大阪

雪は四合まではない。四合五勺あたりから沢の中にまだ相当量の残雪を見る。六合までは夏道ぞいに雪溪の中やふちを登る。28日は快晴でアイゼンをつけて小屋のすぐ上から一気に頂上まで直登した。心配した風もない。八合目あたりから投稿は息苦しさを覚えて足も気も乱れる。頂上はさすがに烈風が吹きまくって食事も満足にとれぬ。下りは平野が前夜からの下痢で調子を乱し、せっかくのグリセードがふいになってしまったのが残念である。山中湖は五月晴れで美しい。 (山本)

◎穂高山行 (明神→奥穂)

メンバー 兼清、宍戸 OB

期間 4月28日～5月4日

4月28日 (曇) 沢渡 (8.30) ^{トラック} - 大正池 (9.30-10.30) - 上高地 (11.30-1.30) - 前明神沢出合 (3.00) - 上高地 (4.30)

上高地線のバスはスノーセットの所不通でバスは、手前でストップ、上高地は旅館が二三軒開いていた。

29日 (晴) 出発 (4.00-10.30) 中食 (12.00) - 明神 4 峰最高峰のコル手前 (3.00) - ビバーク地 (5.00)

途中で市大の春のスリッパの荷を発見したりして時間が予想以上にかかり明神 4 峰岳沢側の岩とはえ松の間でビバークする。

30日 (晴後曇ガス) 出発 (10.00) - 前明神コル (1.30) - 前穂頂上 (3.00) - 奥穂頂上 (5.20) - 穂高小舎 (6.00)

奥穂頂上手前からガスとなる。前穂頂上で OB 二木氏のパーティに会う。

5月1日 小雪夕方晴 朝から雪が降り停滞。

2日 晴後曇 午前中晴れていたが穂高小舎出発の頃から天気が悪化して来た。涸沢ヒュッテ前の二木氏のパーティのテントに泊る。

3日 快晴 涸沢発 (12.30) - 横尾 (3.00-3.30) - 徳沢園 (4.30) - 上高地 (6.00) - トラック 中の湯 (7.00)

北尾根に行く予定であったが濁沢が一面の表層ナダレなので中止して下った。上高地は行きの静けさと打って変わって夏の上高地を思い出させる様に多くの人が入っていた。

4日 曇 中の湯 (8.30) - 沢渡 (10.30)

橋かけかえのためバスが沢渡までしか入っていないので疲れた体をひきずって沢渡へ下る。 (兼清)

◎笹ヶ峰学連合同登山

4月28日-5月2日

参加 関西学生山岳連盟参加大学代表

阪大代表=岡田、野田

時間記録

4月27日 大阪発

4月28日 (薄曇) 田口駅 - (バス) - 杉野沢村 - 笹ヶ峰京大ヒュッテ

4月29日 (晴) 外輪山他一カ所に分散ツアー、野田軽い捻挫

4月30日 (晴) 黒沢池方面へ全員でツアー、野田停滞

5月1日 (雨後曇) 午後、近くの斜面でスキー練習

5月2日 (曇) 解散、各自適当に下山

笹ヶ峰は目前に黒姫山を望む静かな牧場で京大ヒュッテも仲々感じがよい。附近の山はのんびりした山行が味わえよう。 (野田)

◎西穂高

4月28日-5月2日

四方、山田、飯田、乾

4月28日 (18.10) 大阪駅発

4月29日 (晴) バスは沢渡手前まで、大正池から見る穂高には予想外に雪が少なかった。

4月30日 (晴) (7.00) 上高地を出発、西穂高荘を経て西穂高へ。(17.00) 上高地へ降りた。

5月1日 (雨後曇) 停滞

5月2日(曇後雨) 日数に制限あるので帰る事にする。四方、山田、飯田はバス路を、乾は徳本峠を越えた。

(6.10) 帝国ホテルー (7.10) 明神池 (7.20) 徳本峠登り口 (8.10) 明神見晴台 (9.00) 大滝山手前のピークより下山 (9.50) 徳本登り口 (11.30) 徳本峠 (15.05) 島々
(乾)

◎五龍ー白馬

1957.5月

メンバー 樋下、大井

4月28日 16.10 発

4月29日 快晴 8.00 神城着、8.25 水道小屋通過、11.05 小遠見小屋で昼食、12.00 出、
〇.00 大遠見着、4.30 白岳下、6.00 五龍小屋着 満員なり。夕食後外に出て見ると、
淡い青の星空に、あまりにも鮮やかな「尻っぽのある」アランドロランド彗星をみ
つけ、しばらくは声も出なかった。

4月30日 薄曇、後風雨 6.15 起床、7.30 小屋発、8.10 五龍頂上、見晴しは非常によ
かった。10.30 小屋にて昼食、11.45 発、途中で雷雨を追いかけながら 3.00 唐松小屋
着、唐松岳往復す。

5月1日 暴風雨、ガス 停滞

5月2日 高曇り、後吹雪 6.50 朝食、7.00 小屋発、8.10 キレット、雪庇は少々残っ
ている。11.30 白馬ヤリにさしかかると吹雪激しく視界 20 米、1.30 白馬村営小屋

5月3日 快晴、雲海 頂上を往復して、10.00 下山、雪溪上端の雪は危険なほど薄く
はなく、デブリにつまづくこともなくガス中を快速でつききる。10.45 白馬尻、12.30
発電所手前で坪井、東氏等四名の白馬主稜行と行き合う。1.20 細野。

規模は小さいが、明るく自由な山行として記憶に残るものでした。 (大井)

◎白馬岳

6月6日~6月10日

メンバー 森川(和)、一山、松木 OG

6月7日(雨) 四ツ谷ー細野ー猿倉 雪猿倉より。

8日(雨) 8.00 猿倉発、10.30 三合雪溪分れ目、12.00 迄様子を見て引返す。

9日 ガス、快晴 5.00 出発ー11.00 頂上、12.00 発、下山して大阪へ。(森川)

◎槍－白馬 縦走

メンバー 兼清、平田、米林、(佐藤－烏帽子下山) (山本、野田、大島、田村、玉井 槍より下山)

期日 7月25日－8月5日

7月25日(晴後曇夕方より雨) 横尾(9.30)－赤沢岩小舎(12.00)－中食(12.10－12.30)－殺生小舎横キャンプ(5.30) 大島が途中で左手をしばらし相当な所まで行っており方の小舎の医者によると下山せよとの事。

26日 雨、停滞、大雨注意報が出ていると小舎で云っていた。

27日 雨、停滞、雨が続き、こんなたき物の少い所では炊事に苦勞する。

28日 雨、停滞、今日で停滞三日、調子の悪い者が大部出て来た。

29日 晴時々曇 殺生発(8.40)－槍の肩(9.20－10.45)－中食(12.30－13.20)－双六小舎(2.45－3.00)－三俣レンゲピーク下のキャンプ地(4.30) 昨夜バカ天の支柱を支える所が強風でやぶられた。今日からは兼清、米林、平田、佐藤の四名である。

30日(濃いガス、午後雨) 三俣レンゲ発(7.30)－三俣レンゲ小舎(8.15－8.45)－水晶小舎跡(11.45)－黒岳(12.00)－水晶小舎跡(11.15)－東沢乗越キャンプ(3.15) 鷲羽岳は雲の平側のまき道を通り時間をかせいだが、水晶の小舎跡の所で黒岳の方に上等の道がついているので右にまがらずまっすぐに黒岳の方に行ってしまった。東沢乗越まで来ると雨が降り出したので露營。

31日(晴) 出発(8.00)－野口五郎岳(9.50)－烏帽子小舎(12.50－2.00)－烏帽子タンボ(2.45) 昨日の失敗のため今日の行程が中途半端なものになり一日ロスする。

8月1日(快晴) 出発(6.00)－南沢岳(6.45)－中食(10.45－11.40)－2,200のコル(1.30)－船窪小舎(3.45)

縦走が始って初めての快晴であった。烏帽子からは人は少なくても良いが道が悪くものすごい所だ。

2日(快晴) 出発(5.55)－七倉岳(6.30)－北葛岳(8.15)－蓮華岳-北葛岳のコル(9.20)－蓮華岳(11.30－12.15)－針ノ木峠(12.45－2.10)－針の木岳(3.15)－針の木スバリのコル(4.00) ついに後立に足をふみ入れた。後ろをふりかえれば槍が遠くにかすんでいる。

3日(晴午後時に曇) 出発(6.30)－赤沢岳(8.15)－鳴沢岳(9.15)－新越乗越(10.00)
－中食(12.10－1.30)－種池(2.00)－冷池(3.45)－鹿島槍釣尾根(6.45)

新乗越は一片の雪も一滴の水もなかった。昨日ここまで足をのぼしていたら苦勞したであろう。釣尾根は非常によいキャンプサイトだ。

4日(晴、午後一時ガス) 出発(8.00)－キレット小舎(9.00)－中食(11.30－12.30)
－五竜岳(1.30)－白岳小舎(2.10)－中食(4.10－4.50)－唐松小舎前(5.10)

後立も今日で、ほとんど終りとなった。さすがに鹿島をこえると多くの人がいる。唐松小舎の前にはおびただしい数のテントが張られていた。

5日(曇後雨) 出発(6.30)－白馬鑓(10.30)－村営小舎(1.30－1.50)－白馬尻(3.15
－3.40)－猿倉(4.15)－^{バス}細野(5.30)

今日は縦走最後の日である。今にもくずれそうな天気のもとを今日中に細野に下るといので猛スピードでとばす。杓子岳のあたりから雨が降り出した。村営小舎に着いてバスの時間を聞いたらぎりぎりであったし、雨も降っているので頂上はあきらめて一目散、猿倉に向って時間記録の様に一般の半分の時間で宙に浮いている様なスピードを出した。

バスの中ではとなりの女の子が顔をそむけていた。7月15日松本出発以来二十日ぶりに風呂に入りたたみの上にねた。(兼清)

◎黒部源流(失敗)

飯田、田端、乾

7月25日(晴後雨)

(5.00)起床、(8.20)9横尾、(11.00)槍沢、(16.25)飛驒乗越⇔槍頂上、(19.05)テント地

何とかして本日中に双六に入ってしまったかったが、9貫目程度の荷で槍沢でへばった、肩を越えて直ぐ天候が悪化して硫黄沢乗越迄も行けなかったのもので、肩と硫黄沢乗越の中間にテントを張った。

7月26日(雨)

夜半よりの豪雨、而も場所も悪く傾斜地なので実にみじめだった。テントは倒れる。水はシュラフを流れると云った状態。寝がえりをすると背中でびしゃびしゃ音がする。四時頃起きて直ぐ双六小屋へ逃げ込んだ。樫沢の登りは全くバテた。小舎は逃げ込んだパーティで満員。

7月27日（雨後曇）

15時40分僅かに雨が止んだので直ぐ出発。三俣蓮華にテントを張る。

7月28日（雨） 停滞

7月29日（曇のち晴）

雨が続いて黒部は薬師沢出合も渡れないとの事。従って最低金作谷迄下りたい計画も問題にならず、又薬師沢をつめて有峰へ出るのも無理との事なので烏帽子から下山する事にした。濁沢を降りた所でテントを張った。

7月30日（晴）

テント地－葛温泉－大町 (乾)

◎三伏峠～塩見岳

メンバー 岡田博、平野恵一、梶山泰男

8月4日 23h30m 大阪発

5日 雨も上がり 15.00 鹿塩着、30m 歩いて塩湯で宿。

6日 7.00 出発、曇り、11.00 広河原着、取りつきより苦しい登り、雨降り出す。14.30 三伏峠着。雨のお花畑が目にしみる。三伏小屋で宿る。

7日 8.00 三伏小屋発、晴、11.30 塩見岳、お花畑で昼寝、本谷山で雨ふり出す。15.00 小屋へ帰る。

8日 10.00 岡田、鹿塩に下る。11.00 平野、梶山、西股を下り二軒小屋へかけこむ。14.30 二軒小屋で泊る。

9日 6.00 二軒小屋発、息せききって転付峠、7.15 峠を下れば自動車道、とぼして新倉 9.30、バスで身延－帰阪 (平野)

◎裏銀座縦走（下廊下より変更）

メンバー 山田、大井、木村、横尾、田井、小野、今井

記録は黒部源流と同じ。

◎白山 玉井

8月19日 晴強風 勝山 07.00^{バス}＝市瀬 09.00^{観光新道}－別当谷出合 12.00－室堂 14.50

8月20日 ガス強風 室堂 05.00－御前岳頂上 05.30－室堂 07.00－別当谷出合 08.30－市瀬 09.35 (玉井)

◎棒小屋沢－十字峡－劔岳

8月20日～27日 村瀬、広橋 OB

21日（晴） 大谷原9時－西俣出合11時－冷小屋4時

22日（晴後曇） 8時小屋のすぐ裏から沢に向って直降、一時間余で開けた川原に降り立つ。棒小屋沢だ。布引沢コヤウラ沢を右に見て牛首沢を過ぎると、やがて川は急速に狭まり滝となる。右岸をへつると突然左手からすさまじい勢で西沢小沢が飛び込んでくる。出合には関電幕舎が退屈そうに並んでいる。丁度正午、昼食をとる。関電の人の話によると十字峡の釣橋は流失したと云う。仕方なく牛首の腹を大きく捲いている関電道をつたう。此の捲き道は劔の大滝を真正面から眺めて素晴らしい。人夫が幾人も道具を運んでいた。午後6時東谷の出合に到着、河原で野宿。雨がポツリポツリと降り出した。飯場の灯がうらめしい。

23日（曇後快晴） 昨晚の雨で全身ビショ濡れ。クラッカーをかじって9時出発。下廊下は通過不能とか、どうにか通れるとか人の話はまちまち。半月峡S字峡を足下に楽しみながら11時十字峡着。黒部本流に架けられた釣橋は流失してはいなかったが相当傾いて渡るにはかなりの勇気を要する状態だった。劔沢の吊橋を渡って昼食。シュラフを乾かしてから午後1時偵察に向う。白竜峡の手前全く廊下状の絶壁の処で栈道が完全にぶち切れていた。他にルートを探してみたが所詮無駄な努力とあきらめて引返す。午後3時。腹一杯食って今日も野宿だ。

24日（雨後曇後雨） 明け方から降り出した雨は仲々止みそうにない。10時十字峡を後にする。意気消沈、1時阿曾原、上りはかなりこたえた。4時過ぎから亦雨、ブルブル震えながら7時前仙人小屋に飛び込む。

25日（ガス後快晴） ガスの晴れるのを待って、9時小屋発、既に内蔵助入りの考えは放棄したので暢気に二股で飯を炊きハダカになって三時間昼寝、5時劔沢小屋に着く。星空を眺めながら始めて快的な露営を楽しんだ。

26日（晴後曇） 10時から二時間余で劔往復。大日を越える積りだったが又もや天候悪化のきざし、遂に最終バス目がけて雷鳥沢を、超スピードで駆け降りた。

（広橋）

◎鈴鹿愛知川

乾

8月29日（晴） 菰野→朝明ヒュッテ（泊）

8月30日（快晴）

(6.30) ヒュッテ発、(7.10) 羽鳥峯、(9.40) 天狗滝、(12.10) 下水晶谷、(14.30) 杉峠、(15.15) 雨乞岳、(16.30) 根の平峠、(17.00) 朝明ヒュッテ、(19.20) 菰野、(19.53) 四日市→名古屋

白滝出合より少し上流大きく迂曲して廊下状淵の手前で右岸を高捲きする。又本流に降りて渡渉しつつ遡行、天狗滝を見て少し戻って右岸を直登し滝を越えて又本流に降りる。廊下状になる所はケルンを探し高捲きする。ヒロ沢でいうい過ぎると大きく迂曲して狭い廊下となる。左岸を捲くと登山路に出る。直ぐ下水晶谷出合、大瀨が終った所で又本流に降り、あとは気持ちの良い源流をジャブジャブ歩くだけ。大峰や大台の谷と異なり花崗岩の明るい沢歩きが楽しめる。石楠花の咲く頃や紅葉の時季ならもっと素晴らしいだろう。(乾)

◎中央アルプス縦走

1. 期日 10月13日～10月16日

2. メンバー 山本、兼清、米林

10月13日午後2時天王寺発午後10時5分木曾福島着、駒の湯にて一泊

10月14日(晴)

6.00起床、6.15駒の湯出発、9.30五合、11.30六合、4.30宮田小屋着、宿泊す。新雪は全くなし。紅葉やや過ぎた感じ。

10月15日(晴) 5.40出発、8.40松尾岳、12.50殿越着、13.40出発、15.00空木岳頂上、15.45出発、16.10空木小屋着。

10月16日(晴後曇) 6.15出発、7.10空木岳、8.50南駒山頂、10.00仙崖嶺、11.15越百山頂、12.15越百小屋、13.15出発、7.15飯田線七久保駅着。

秋の試験休みには前から黒部上廊下へ行きたいと考えていたが日数が足りぬため中央アルプス縦走を企てた。上松から上らずに木曾福島にしたことには別に意味はない。

稜線には新雪は全くなく山は紅葉が大体落ちた後だったが、それでも部分的には十分我々の目を楽しませてくれた。中ア稜線は宝剣附近には少し嫌なところがある外は登り下りは多いが、たんたんとした縦走路である。西方には絶えず御岳の秀れた山容を眺めることが出来るし、東方には甲斐駒以下の南ア連山その間から富士山も大きく見えている。北方には乗鞍から笠、穂高が遠望されるし、八ヶ岳はすぐ眼前に美しい裾野をひろげている。天気の良い時のこの稜線は正に展望コースであくことを知らな

かった。スケールは小さいが、大阪からのアプローチもかなり近いし、短時間で十分楽しめる山々である。
(米林)

◎奥秩父

山田、乾

10月26日

大阪駅発 18.09

10月27日 (晴れたり曇ったり)

6.59 葦崎ー増富ラヂウム鉱泉ー金山高原ー16.30 大日小屋

金山高原は顔の染まる様な紅葉。

10月28日 (晴れたり曇ったり)

5.00 大日小屋、7.30 金峰山ー鉄山ー朝日山ー大弛ー国師岳ー16.50 水師岳、17.30 甲武信岳、17.50 甲武信小屋

10月29日 (曇後雨)

6.10 甲武信小屋、6.30 甲武信岳ー西沢ー千曲源流ー8.40 戦場ヶ原、9.45 梓山、10.60 信濃川上ー小淵沢
(乾)

◎秋山 双六ー燕岳

冬季赤牛岳登頂の為の荷上げをした後三パーティに別れて縦走をしたが、我々九人は燕まで行くことにした。

メンバー 村瀬 (L)、平田、米林、田村、黒田、大工原、木村

11月4日 曇 槍迄は三パーティ共に行く。雪は少なく槍の登りのところで始めて踏みしめた。

双六小屋 10.35ー乗越 (12.25ー13.00) ー肩の小屋

11月5日 曇のち雪

さすがに槍まで来ればもう雪化粧をしていた。こちらから見た北鎌は西鎌より見たそれ程すばらしくはない。日の照り返しに目を細めて西岳に向う。雪は少なくしまっていた。九時頃より雪がちらつき始める。西岳の登りは少し苦しむ。西岳小屋にて昼食。大天井ヒュッテのところで常念パーティと別れる。チラチラする雪の中を燕へ。裏銀座展望コースを歩きながらそれを見得なかったのは残念であった。

晩飯の、味噌につけてあったことを忘れてその上に塩をかけて食ったテキの辛かったこと……。常念パーティもやった由。人間似た事を考えるものだと笑い合ったことである。

肩の小屋 7.45－西岳小屋（11.10－12.10）－燕冬季小屋 17.00

◎双六岳→槍ヶ岳→常念岳縦走

11月4日～11月7日

メンバー 山本（L）、野田（L）、広瀬、田井、笠松、玉井、大島

11月4日（曇）

起床 8.00 出発 10.30 千丈沢乗越（昼食） 12.30 槍肩小屋 15.25 夕食 18.30

千丈沢組を先頭に次々と出発する。小休止毎に先になり、後になって少しづつ槍に近づく。

西鎌尾根の最後の急斜面は雪が三十センチ位積り、それがクラストしていて、非常に歩きにくい。なにしろ私達新人はこんな状態の雪に会うのは初めてなので大いにまごついた。しかしどうやらこうやら肩の小屋につく。さすがに風も強く、手がしびれそうだ。うれしいことに小屋には番人が居り、ストーヴをたいていた。早速飛び込んで暖を取る。ひょいと外の寒暖計を見るとなんと氷点下十度で、又新人一同驚きの声をあげる。

11月5日（晴後吹雪）

起床 5.30 出発 7.45 殺生小屋 8.00 西岳小屋（昼食） 11.05 常念小屋 16.45 夕食 18.30

天気予報によると今日は吹雪である。明方、ガスがひどく槍の穂先も全然見えなかったが、朝食も済んだ頃には次第に晴れてきたので、出発することにする。燕組と一緒に東鎌を下る。昨日と同様、雪がクラストしているので歩きにくい。それに恐怖心も手伝い、鎖や梯子のかかっている所では大いに時間をとる。西岳小屋で昼食をとった頃から、天気がくずれ始め、以後はずっと吹雪きが続く。大天井岳で燕組と別れ私たちは常念小屋へと急ぐ。吹雪は一層つのもり、視界は百米位である。地図と磁石を頼りにして何回も方角を確めながら進む。東大天井、横通岳を過ぎ、常念小屋への下りにかかる頃には薄暗くなり始め、樺や樅の林を抜けて、小屋のトタン屋根を発見したときはホッとした。小屋には番人が居た。

計画では大滝、徳合と縦走する予定だったが、悪天の為中止し、明日一ノ沢を降ることにする。その結果夕食はゴーゼーなものになった。

11月6日(晴)

起床 5.30、出発 7.40、笠原 9.05、ワサビ沢出合(昼食) 11.10、烏川橋 14.40^{バス}—松本
(大島)

◎双六—千丈沢—葛

メンバー 宍戸OB、前田、佐藤

11月4日、双六小屋を出たのは10時だった。空は曇っていたが低くはなかった。はい松の緑は生彩を失っていた。宮田新道が槍の西鎌尾根に達するところ、そこを出たのが13時だった。眼前にそびえている筈の槍はガスの彼方に没していた。千丈沢のがらがらの下りは急で長く、そして歩きにくかった。七百米も下っただろうか、岩の下からちよろちよろと流れる水を見つけた。僕等が下るにつれて、この流れも大きくなり、やがて高瀬川の激流に変貌するのだ。道は谷間にさしかかる。秋の落葉が厚く散り敷いている。谷のむこうに、時々、思いがけず燕岳がみえる。暗い溪谷から眺めると、そこには陽があたっているかのように思われるのだった。湯俣の出合は5時だった。僕がのびていなければ、四時半にはついていた筈だ。その後、まだ80分ほど下って、とある飯場に泊った。これは千丈沢で出合った人夫たちの好意によるもので、一泊二食付きタダであった。

5日、高曇り。8時半に飯場を出た。「縁といのちがあつたらまた会いやしょう」人夫たちのひとはそんなふう云った。川に沿った森林鉄道の枕木を踏んで下りつづけた。葛温泉についたのは11時半だった。(佐藤)

◎双六→槍→南岳→上高地

岡田、兼清

11月4日 双六—槍の肩 他のパーティと同じ。

11月5日 曇後風雪 下は雨

槍山荘発 8.50—中岳 9.50—南岳 10.25—11.15 中岳—槍山荘 11.55—12.35—横尾
16.50

槍から穂高に縦走するつもりであったが、天気が悪く停滞するとゲルがなくなるので空身で南岳まで完全に視界をさえぎられた雪の中を往復して来て横尾へ雨の中降りた。

11月6日 高曇り 9.00 横尾発－12.00 上高地着

ほとんど人のいない道を秋の静けさにひたりながら岡田さんと二人のんびりと上高地へと歩いた。途中で見た雲の切れた明神最南峰は美しかった。 (兼清)

◎遠見尾根→五竜 11月22－23日

雪は予想外に少なかった。真白な山を予想していた兼清君と自分の二人、神城駅に下りてしばし唾然とした。途端にワカンの目方だけ荷が重く感じられたことである。

二人だけの山行は気のおもむくまゝ、又格別な味がある。落葉にうずもれた細い山道、遠見の支稜線に出る。自分の且て踏みしめた山々を味い、その時々を懐想する時、懐かしい思い出がよみ返って来る。今は雪化粧した白馬三山、唐松、少し顔尾をのぞかせている五竜……。現実に返って登る時はつらい。重荷に喘ぎ喘ぎ小遠見に着く。クラッカーをひっそりと食っている前で他パーティが美味そうな大きなおはぎをパクついていた。この辺りから少し雪が出て来た。鹿島槍がこれでもかと北壁を前に据えて雄姿を見せる。大遠見でテントを張ることにするが、雪の豊富の格好なテント場がない。あたりをキョロキョロ二人は捜しまわった。夕陽に映える五竜が我々を待っている。コッヘルに雪をとる時、チラチラまたく星が明日の晴天を伝えてくれた。翌日は早く出た。サブを一つかついでこゝ迄かついで来たのだからとアイゼンを着けて夏道を避けて沢を登る。モデルになったりなってもらったりして白岳の小屋に着く。稜線の夏山はところどころ出ていた。十二時頃五竜頂上に着く。剣立山が実にすばらしい。薬師、かすかに槍が顔をのぞかせている。早々にテントをたゝんで凍りついた道を幾度もしりもちをつきながら真っ黒な中を神城に下りた。冬山の時吹雪の中でテントを張ったどさくさまぎれに記録を失ったのは残念である。

(平田)

◎奥越高原 経ヶ岳

メンバー 田村、笠松、玉井

3月1日 早朝福井につき勝山市の雁ヶ原スキー場にて楽しむ。雪も人も少ない。

3月2日～5日 大野市六呂師スキー場。天気がくずれたためブッシュが完全にうまり、初歩的な練習を行う。

3月6日 高曇り無風、経ヶ岳

どうやらスキーができるようになったので、当地よりすばらしく見える経ヶ岳にアタックすることにした。7時知人宅を出発。9時西南〇にとりつきシールを「つける。南側に雪庇があるので北側をジグザグ登る。10時より急斜面にとりつき11時半1122mの地点につき少し登ってスキーをデポ昼食をとる。アイゼン・ピッケルを持たず、ワカンだけなので雪の庇のある細い尾根で時間をくい、1490mピークまで達したがあと200mの尾根が非常にクラストしているのでこゝで引返した。4時デポにつき、6時に帰着する。 (玉井)

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

岩登りトレーニング記録

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

昭和三十二年度は岩登りトレーニングもかなり充実したものが行われた。意気盛んな新人が多数いたためであろう。又その効果も十分に上った様だ。以下にその記録を簡単に記す。

5月18日-5月19日 新人歓迎キャンプ

現役・OB・新人の交換に愉快に過ぎた。 道場

5月26日 仁川岩場ムーンライト、バットレスにて確保の練習。

上級部員の参加少し。

参加者 岡田、山田、野田、兼清(新人)、小野、大島、三宅、玉井、田井、木村、平田、横尾、前田、田端、佐藤(OB)、西川、松木

6月2日 屏風岩 各ルートの登攀

大井、山本、兼清、飯田、大島、三宅、田村、玉井、米林、小野、井畑、今井、小野、笠松、森村、平田、広瀬OB、松木

6月9日 芦屋ロックガーデン

A班L 西川OB、野田、Bケン、キャッスル

B班L 樋下、山本、キャッスル、イタリアン、ブラックフェイス

参加者 上床、佐藤、三宅、木村、梶山、井畑、今井、米林、小野、玉井、笠松、大島、前田、田端

6月16日 屏風岩

参加者 岡田、一山、森川、野田、兼清、大島、玉井、笠松、佐藤、田井、横尾、今井、井畑、広瀬

私鉄ストの影響か、集りやや悪し。新人部員の上達振りも目に見えてきた。

6月23日 六甲大月谷

大月谷から主稜線に出て、更に東六甲を縦走し宝塚に至る。

参加者 山本、野田、米林、玉井、笠松、田村、田井、梶山、前田、横尾、黒田、
今井、井畑、大工原、平田、木村、広瀬、小野（公）

6月30日 芦屋ロックガーデン

参加者 岡田、森川敬、大島、三宅、玉井、笠松、佐藤、田村、田井、平田、広瀬、
大工原、黒田、河津、小野

7月14日 芦屋ロックガーデン

参加者 兼清、森川敬、米林、田村、広瀬

8月20日 仁川岩場

参加者 山本、米林、佐藤、梶山

10月9日－10日 道場河原にてキャンプ

不動岩、百丈岩にて練習

参加者 野田、山本、平田、米林、玉井、梶山、田村、田井、佐藤

10月20日 歩行トレーニング

花屋敷、満願寺、十万辻、武田尾、千刈－道場

参加者 広瀬、田村、大島、大工原、田井、森村

11月23日 芦屋ロックガーデン

午前中イタリアンリッチ、キャッスルウォールに、午後ブラックフェース→城山
一年生部員の成長振り順調、トップに登らせても安心して見ておれる様になった。

参加者 岡田、野田、山本、米林、大島、三宅、玉井、佐藤、笠松、田井、梶山、
大工原、野瀬、広瀬

12月1日 蓬萊峡

参加者 岡田、野田、兼清、米林、平田、大工原、玉井、笠松、佐藤、田村、梶山、
大島

12月7日 芦屋ロックガーデン

参加者 米林、平田、田井、大島

12月8日 芦屋→宝塚

笠松、大工原、大島、田村、村井

12月15日 箕面→妙見

大島、田村、三宅

＝ビニロン一号テント製作＝＝＝＝＝
＝ 寄 附 金 決 算 報 告 ＝

収入合計	42,350
テント 製作費	27,500
通信費	
その他	3,512
残高	11,338
残金は、バーナー、エアー マットなどの装備の購入に あてさせて頂きました。	

昨年末テント新調について先輩諸兄から多大の御援助を頂き誠にありがとうございました。お蔭様で本時報に報告致しました様に、冬山、春山の合宿を成功させることが出来ました。

寄附金集金責任者の宍戸元氏（医卒）より明細を頂きましたので左に報告致します。

なお寄附をお寄せ下さった方を左に上げ、厚く感謝致します。

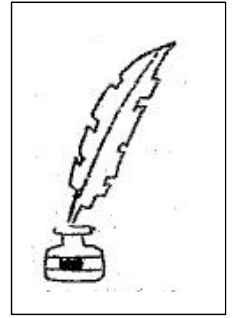
医学部 小浜基次、水野祥太郎、徳永篤司、岩永剛、松久博、小沢逞夫、石沢命久、
伊藤俊夫、坪井圭之助、大久保勝巳、東雍、尾藤昭二、住吉仙也、宍戸元
工学部 篠田軍治、近彰三、二木節夫、西川元夫、立花直治、川島勇、宮本貞雄、久
保三朗、京極与寿郎、松本裕太郎、乾晶弘、梶原信夫
理学部 大島輝夫、加藤幹太、大村一生、新保正樹、水野健次郎、山本進一郎
法学部 山本光二、広橋茂
経済学部 土屋直氏
薬学部 三枝礼子、抱忠男
文学部 由比浜哲也

(以上 41 氏)

寄 附 御 願 い

昨年末冬用テントを新調し、使用可能なテントは二張となりましたが、今回の冬山合宿、来春の春山合宿に備えて更に二張の新調を計画致しております。何とぞ御援助下さいます様お願い致します。

編集後記



◎今回の時報第九号は七月初旬に発行の予定であった。そのため原稿も早めに集めていたのであったが、主要な一部の原稿が非常に遅れ、それから夏山合宿、九月十月の試験のため計画が捗らず、結局、昨年同様年末発行となった。深くお詫びする次第である。

◎今迄時報に名簿を付けていたが、最近非常に不明瞭になっており、その整理もまだ十分でないので、名簿だけで改めて発行することにした。その方が訂正出版もよいであろうとおもう。今後 OB 諸氏も転居された場合など連絡の労をとられたい。

◎近年各山岳会の会報出版も盛んになり、年二回以上出版も普通となりつつある。我が山岳会においては毎年現役が全てを担当し、しかもそれが毎年交代するので不慣れのため仲々スムーズに行かない。時報発行が山岳会としての重要な仕事のひとつであるのだから、ここで時報発行の一つの組織を作ることをご提案したい。例えば OB 数人と現役幹部により時報編集委員会の如きものを作り、OB と現役の密接な連絡のもとに計画を進めていく。こうしたことを二・三年続けると時報編集から発行迄一つの工程の如きものが出来上り、今の様毎年編集者が新しい問題にぶつかって困っているよりも、ずっとスムーズになると思う。

◎内容については、特に目新しい点はないが、篠田先生には昨年渡米された際のお土産話を書いていただいた。一般の山行記録は、例年余り簡単すぎて味がなかったのので、少し文章も入れた。そのため頁数がやや増加してしまった。

今回の編集にあたり宍戸先輩に多くの助言を頂いた。又現役田村、玉井両君にもいろいろ助けて頂いた。厚く感謝する次第である。 (米林外茂男)

昭和三十三年十二月

大阪大学山岳会 時報 第五号
編集責任者 米 林 外 茂 男

大阪市北区常安町

発行所 大阪大学 学生部内

大阪大学 山岳会

大阪市西区江戸堀北通三丁目

印刷所

美

研

電話 (44) 五〇八番 社